クラブ会長・幹事さんのために

《ロータリーこの麗しきもの》

ガバナーメッセージより

国際ロータリー第2510地区
2005-06年度ガバナー 塚原 房樹

クラブ会長・幹事さんのために

《ロータリーこの麗しきもの》

CONTENTS

発刊にあたり…… 01

奉仕の新２世紀を迎えて…… 02

ロータリー！　より拡く、より強く …… 05

『ロータリアンは青少年の模範』
青少年はロータリアンの鏡…… 07

今こそ職業奉仕を！…… 10

「寄付と喜捨」…… 12

「ロータリーの本（忘れ得ぬ一冊の書）」…… 15

ロータリーと否定の論理…… 18

［追悼記念週間］
ロータリー揺籃の地ウォーリングフォード…… 21

仮面（ペルソナ）を脱ぐ場所・ロータリーの例会…… 25

悟後の悟り・ロータリーは生涯学習の場…… 28

めぐる歯車…… 31

和魂洋才…… 34

ロータリーこの麗しきもの…… 37

参考引用文献…… 40

2005 - 2006年度
国際ロータリー第2510地区
ガバナー **塚　原　房　樹**

発刊にあたり

ロータリー100周年を終えた、101年目、「ロータリー奉仕の新世紀」の幕開けの年に光栄にもガバナーを務めることが出来ました。ステンハマーRI会長は奉仕の新世紀のスタートに当たりRIのテーマに原点回帰の願いを込めて、ロータリー標語、『超我の奉仕』を示されました。ロータリーは世界的な組織であります。RIのテーマを始め重点課題が世界中のクラブに毎年示されます。
私たちはそれらに沿った活動をしなければなりません。しかし私たちはその大きな流れにのみ込まれて押し流されるだけであってはなりません。強制されて、自分を忘れて走るのではなくて、望ましいのは各自がロータリーの本質を知り、信念を持って落ち着いて歩む人たちの組織であることです。いくらロータリーの組織規定や奉仕プログラムを学んでも、その精神が判らなければ、ロータリーが判ったとは到底云えないでしょう。より良い地区運営の基本は各ロータリアンに、ロータリーの本質を理解してもらうことがガバナーの大きな使命と信じているからです。

月信の発行はガバナーの重要な任務です。毎月ガバナーから直接、会長幹事さん宛てに巻頭のメッセージを書きます。その内容は主にRIニュースやロータリーの月間にちなんだ情報、また地区内の各クラブの情報を取り上げます。
しかし地区にはそれぞれの分野に担当地区委員長がおり、その月間に応じた情報が提供されます。したがって私は屋上屋を架すことを避け、ロータリー運動の真の目的、またロータリーの背後にある哲学についてメッセージを書きたいと思いました。このメッセージを書くことが出来ましたのは、全国で唯一、当地区の文献資料室のおかげであります。文献資料室は「ロータリー思想」の殿堂です。私はその室長として管理運営に関わってきました。そしてロータリーの先達の素晴らしい思想に触れることが出来ました。先人の心を今のロータリーに活かしてもらいたいと思い、珠玉の言葉の数々を参考に、また直接引用させていただきました。（巻末の参考・引用文献参照）

幸い私の拙いメッセージはおおむね好評をいただきました。月信のメッセージを小冊子としてまとめてほしいという声がクラブの内外からありました。あわただしい公式訪問の合間をぬって十分な推敲もせず書いたもので、逡巡しましたが、いささかでもお役に立てればと思い発刊いたしました。私にとりましてガバナーの１年間は辛くもありましたが、充実した感激の日々でした。ご指導、ご支援いただいた多くの方々に心より感謝を申し上げ小冊子発刊のご挨拶とします。

奉仕の新2世紀を迎えて

2005年7月1日、すがすがしい青葉の季節、われわれロータリアンにとってロータリー101年目の第一歩を刻む特別の日が参りました。いよいよ「奉仕の新2世紀」の幕開けです。ロータリー100年の歴史とは平和な社会を目指す無数の先輩ロータリアンの祈りと願望の累積でありました。100年という歳月は組織にとっては序の口ですが、100歳の寿命を全うする人はまれです。私はそれを学びつつ、やがて、自分も束の間にしてその歴史の中に埋没しまうことを知ります。しかし自分は確かに生きていると感じさせるものがあります。人生を人生として私たちに確認させるものは、一言で言うなら邂逅…出会いであると言っていいでしょう。ロータリーの綱領の第一に「奉仕の機会として知り合いを深める」とあります。私はロータリーによって結ばれた友情に人生の人生たる証を見ようと思います。若しロータリーの会員に選ばれていなかったら、若しロータリーで巡り合えた友人たちがいなければ私の人生はどうなっていたであろう、「ロータリー奉仕の新世紀」のこの時、そこに生ずるのは身の引きしまるような感謝の念と歓喜であります。どうか会長・幹事の皆様と共に、温故知新、100年間ロータリーを支えてきた邂逅と友情を大事にして、未来のロータリーに向けて先人の知恵を活かしてまいりたいと思います。

RIの今年のテーマはロータリーが過去に作り出した最高の標語、**サービス アバブ セルフ「超我の奉仕」**です。これはロータリーの原点回帰であり、ルネッサンスであります。ロータリーは時代の変化と共に組織、機構、奉仕プロジェクトは変わります。しかし時代を超えて変わらないもの、いや変えてはならないものがあります。それがサービス アバブ セルフ「超我の奉仕」の標語です。これこそロータリーの普遍の真理であります。カール・ヴィルヘルム・ステンハマーRI会長の101年目にかける熱き思いをおくみとりください。**「超我の奉仕」はロータリアンの心の光明であります。ロータリアンの心の光明は人により、程度に応じて社会を潤します。**このようにロータリーの奉仕は与えた金額の多寡によるものではないのです。ロータリアンがおかれた千差万別な状況に応じて、自己の能力を省みて、超我の奉仕の自然的発露として、地域社会のため実践するものなのです。クラブを充実させる方法は、基本に立ち返り、ロータリーの礎石となった基本原則を守ることであると、私は堅く信じております。その原則とは、何十年にわたってわれわれをここまで導いてくれた「超我の奉仕」に他なりません。

ただ“SERVICE Above Self”は日本語に「超我の奉仕」と訳されています。これではあまりにも堅すぎます。米山梅吉さんが訳した「奉仕第一、自己第二」位のニュアンスでよいと思います。ロータリーの機構は、いろいろな歯車から成り立っています。時代とともに奉仕プログラムは多岐に亘り初心者にはロータリーの姿が見えにくくなってしまいました。玉ねぎの皮を一枚ずつ剥いていくと最後に芯があります。その芯に当たるものが“SERVICE Above Self”なのです。ロータリーとは何かという問いにはいくらでも難しい言葉で議論できます。しかし真理はいつも単純にして平凡なものです。ロータリーとは超我の奉仕のことなのです。したがって今年度のステンハマーRI会長のテーマは行動ではなくロータリアンが必ず心の中に育んでゆかねばならないロータリーの中核思想であり主概念なのです。

RI理事会よりクラブリーダーシッププラン（CLP）が推奨され、四大奉仕部門は実質的に遠ざけられた感があります。しかしその反面アナハイムの国際協議会では、今年の重点課題として四大奉仕部門の重要性が特に強調されました。

会長・幹事さんの第一の役割は、効果的なクラブの構築です。会長要覧には①会員の維持と増強、②奉仕プロジェクトの実施、③財団支援、④指導者の育成の4点が示されています。この4点は互いに関

連しあっています。またこれらの土台となるものは四大奉仕部門です。つまり効果的なクラブ達成の要は四大奉仕の推進の上に成り立ちます。したがって会長・幹事さんはクラブが四大奉仕プログラムをバランスよく実践できるように配慮してください。

四大奉仕プログラムは綱領の中に記されています。また手続要覧に詳細が記述されております。このように言うと、難しく考えて身構えてしまいます。

しかし会長さんの任務は会員にロータリーの本質をやさしく、単純化して要点を伝えなければなりません。私はハロルド・トーマス元RI会長の「友愛の橋を架けよう」という言葉が好きです。ロータリーの目的は友情溢れた世界にするために友情の架け橋を築くことでした。このことは、ロータリー運動の最も大事な原点であり、また「クラブ、職業、社会、国際奉仕」という四つの奉仕部門は「友愛の架け橋」から誕生しました。ロータリーの基本である四大奉仕について、ニュージーランドのハロルド・トーマス元RI会長の単純明快な解説をご紹介します。アンダーラインの部分が四大奉仕プログラムの核心です。

「我々はまず手始めとしてどのクラブもどのクラブも皆友情溢れたクラブにすべきである。ビジターとしてクラブを訪れた人たちが、当時のスピーカーの話や当時の弁当のことなど忘れてしまった後までも、当日差し伸べられた歓迎の暖かさと、会員の友情の暖かさを忘れることが出来ない…そのようなクラブ。あなたのクラブを友情溢れたクラブにするために自分の任務を果たすこと…これがクラブ奉仕なのだ」

「会員の一人ひとりが、従事する仕事の改善のために各々その役割を果たすクラブ。あなたの企業を友情溢れるような企業にするために自分の任務を果たすこと…これが職業奉仕なのだ」

「会員の一人ひとりが、各々その地域社会における自分の責任を自覚して、良き隣人であり良き市民である…というようなクラブ。あなたの地域を友情溢れた社会にするために自分の任務を果たすこと…これが社会奉仕なのだ」

「会員の一人ひとりが、ロータリーは国際ロータリーなのだと言うことを自覚するクラブ。自国に対するゆるぎなき忠誠はロータリーの会員となるための前提条件であるが、ロータリアンたるものは、それと同時により広い人類同胞の一員であることを認識しなければならない。この世界を友情溢れた世界にするために尽くすこと。これが国際奉仕なのだ」以上がトーマス氏の言葉です。

ロータリー運動は、ロータリークラブで結ばれた友情がすべての活動の基礎となります。もっと友情溢れる、もっと親しみやすいクラブにするために親睦を大事にしてください。

親睦が深まれば、出席率が向上します。出席が良くなればロータリー情報が浸透します。情報が伝わるとロータリーへの理解が深まり奉仕活動が活発となります。奉仕活動が盛んになると親睦が増します。そして出席率が向上します。ロータリー循環論です。ロータリーの歯車は良い方向へ循環します。これが効果的なクラブの構築です。反面クラブ活動に魅力がないと、出席が悪くなり親睦も振るわず悪い方へと循環します。会長・幹事さんは、全会員が参加できる魅力あるクラブ活動を常に心がけてください。

クラブ会長・幹事さんと共に、熱意を持ってこの輝かしいロータリー新世紀の第一歩を歩んでまいりたいと思います。間もなく公式訪問でお会いできることを楽しみにしております。

ロータリー！　より拡く、より強く

雲の峰に夏の訪れを知ります。会長・幹事さん、いかがお過ごしでしょうか。私もシカゴの国際大会より帰国後、間もなく公式訪問が始まり忙しい日々を送っておりますが、息災に過ごしておりますのでご安心ください。ご承知のように8月は会員増強および拡大月間です。RIの任務の第一はロータリーの拡大です。なぜなら全世界にわたってロータリーの理想を推進するためには、会員数が増えクラブの数が増えればそれだけ奉仕の輪が広がるからです。したがってロータリーの拡大・増強は国際ロータリーの永遠のテーマです。以前は増強を議論する時必ず量か質かの問題が提起されましたが、最近は職業人としての質はお構いなし、人の顔さえ見れば入れ入れとロータリアンは会員増強がノルマとなりました。ロータリークラブは数を頼む集団となりロータリーの心は失われてしまいました。その結果、「悪貨は良貨を駆逐する」の例えの通りロータリーは魅力を失い大事なクラブの宝であるベテラン会員の退会が相次ぎました。何故RIはなりふりかまわず会員増強に憂き身をやつしたのでしょうか。歴史的背景を探ってみましょう。ロータリーの金看板と言われ、ロータリーを今日の隆盛に導いた職業奉仕はポール没後、ロータリー運動の主流から外れました。すなわち1947年、ポール・ハリスが亡くなった年にRIの職業奉仕委員会は廃止されました。そして第二次世界大戦を契機に世界平和の考え方が導入されます。また1960年頃からWCSが中心になり、国際ボランティアの道をRIは選択しました。3H、ポリオプラスと進展し名実共にロータリーは職業奉仕を捨てて、国際ボランティア団体となりました。

さらにロータリー財団の創立が国際ボランティア運動推進に拍車をかけました。1917年アーチ・クランフが財団を設立しました。最初は寄付が集まらず開店休業の状態でしたが、ポールの死を悼んで財団奨学生のためのポール・ハリス・フェローが盛んになりました。莫大な寄付金が集まりました。もともと教育を通して国際理解を深め、その結果として世界平和を図ろうという目的で出来ましたが、財団本部が国際ボランティア事業を拡大して自ら事業主となりました。財団はもともとRIの一機構に過ぎなかったのですが、財団がRIの主役となりました。今や財団無くしてロータリー無し。そしてRIは財団の集金係りとなりました。財団がボランティア活動に専念する為には、大量の資金が要ります。会員増強が至上命令となり、なりふり構わぬ会員増強と財団寄付が叫ばれます。私はRIが国際ボランティア活動に参加する事を否定するものではありません。ロータリーは世界的な組織であります。だからロータリー財団は世界的なマクロな視点に立つのは当然です。会員増強と財団寄付を最重点目標として、飢餓追放、貧困対策、災害救助、疾病予防、識字率の向上など国連や赤十字、ユニセフのお手伝いをする人道的国際奉仕の道を進むのは当然の成り行きであります。世界は一つ、世界平和の為に弱者を救済する事はロータリアンの義務であり、我々も協力は惜しむものではありません。

しかし奉仕の心を学ぶ場であるロータリーが、このようにしてボランティァという刹那的な金銭奉仕にのみ心が奪われると、ロータリー運動の原点である親睦の理解が上辺だけのものにならざるを得ず、ロータリー運動の虚飾性は一段と強いものになってきます。そして、その上、ボランティア活動そのものは奉仕の適切なテーマであるにしても、その寄付活動に参加する前後の「心の空洞化」は回避する事は出来ず、ロータリー運動の実情は単なる偽善的かつ断片的なお付き合いの奉仕活動となってしまっているのであります。日本ロータリーの始祖、米山さんが例会出席を通じて、各ロータリアンとの親睦の内にロータリーの心を会得し、その心をもって千差万別な実践活動を行ったのとは大変異なるのであります。最近のロータリーは奉仕の心の裏付けの無い断片的行動ないし、団体的事業計画の奉仕ばかりで、二重人格的世界の中の仮住まいという情けない状態になってしまいました。

長々とポール・ハリス没後のロータリーの流れについてのべました。しかしロータリー100周年を機にその潮流が少し変化しました。その一環として国際協議会で職業奉仕の再構築が取り上げられました。職業奉仕はロータリアンにも地域の人たちへもベネフィットを与えてきました。その職業奉仕をないがしろにしてロータリーは魅力を失い、求心力を失いました。会員の退会増加がそのことを明確に示しています。長い間国際ロータリーでは職業奉仕という言葉は「死語」となっていました。しかし昨年２月の国際協議会で今まで誰もRIの公式講演の場で発言できなかった職業奉仕の再構築について元RI会長ビチャイ・ラタクル氏は爆弾的・革命的発言をされました。ラタクル氏の講演を引用します。「ロータリーは貧困、飢餓、疾病に苦しむ何十億人もの人を救い、豊かにしてきました。ロータリーが人道的経済的プログラムで嵐を切り抜けどれほど貢献してきたか、それは誇るに足ることです。しかしそれは立派なことであっても所詮外面的な行いを見ているに過ぎません。ポリオとの戦いには勝つでしょう。あらゆる病気、教育、貧困になおも手を差し伸べなければなりません。この世に善を成すためには、自らの力の限界を知らなければなりません。しかし力の源となる奉仕の哲学が事々に裏切られたのが今の世代なのです。私が申し上げたいのはロータリーの内面の問題です。ロータリーに課せられたもっとも重大な挑戦課題でありながらここのところずっと無視されてきた問題です。いく年もいく年も話題にもされず討議もされなかった挑戦課題　それはロータリーの金看板職業奉仕です。今もこれからも職業倫理の提唱と自愛の心をロータリアン以外の人々に分かち与えていかねばならないのです。残念ながら私たちの多くがこの最も重要なロータリー哲学の真髄を忘れてしまいました。なんと恥ずかしいことではありませんか」

ロータリー101年目、我々に課せられた最大の使命はかつてロータリーを隆盛に導いた職業奉仕の再構築です。増強・拡大はロータリーの永遠の課題です。しかしその前に魅力あるクラブを作ることが大前提です。ラタクル元RI会長の言葉どおり職業奉仕はロータリーの魅力の源泉でした。（これについては10月の職業奉仕月間で触れます）

各クラブ会員純増１名はステンハマー会長の要望です。新たなロータリーの世紀を踏み出す仲間を１名増やしてください。また増強は単にRI会長の要望だからするのではなく、クラブの存続にも新しい血の導入が欠かせません。ただし会員の選考はクラブ細則の通り厳格に行ってください。２、３の不良会員を入れるとクラブ全体が駄目になってしまう。「りんご箱の中のりんごが１個でも腐ると皆腐ってしまう」という言葉があります。今年のアナハイムでもヨーロッパは会員選考を厳しくしたので会員数が増えてきたという報告がありました。会員選考は世界的に量から質への回帰が再び問われる時代となりました。難しいことですが、ロータリーに相応しい新会員を探してください

いささか駄弁を弄してしまいました。向暑のみぎり会長･幹事の皆様のご健勝をご祈念申し上げます。

『ロータリアンは青少年の模範』青少年はロータリアンの鏡

会長・幹事の皆様にはお元気でこの夏を過ごされていることと存じます。

私も無事に公式訪問を続けておりますのでご安心ください。ところで9月は「新世代のための月間」であります。この月間中には、ロータリーの提唱するすべての青少年活動に焦点が当てられるべきです。各クラブはロータリーの伝統ある標語「ロータリアンは青少年の模範」という標語をクラブ会報、特に新世代月間中の会報に、また青少年活動についてクラブに報告する時に使うように奨励されています。地域社会の指導者であるロータリアンは、将来を担う若い人々の模範とならなければなりません。青少年の指導力を伸ばし、市民としての責任感を培うことは、ロータリーの青少年活動の変わらぬ目標なのです。

青少年交換はロータリーの青少年活動の中で最も好評なプログラムです。事実地域の人たちがロータリーと最初に出会うのは青少年交換なのです。RI理事会は青少年交換活動の実施に当たり新たに推奨指針を次のように設定しました。

『青少年交換プログラムは、プログラム参加者をめぐる肉体的、性的、精神的な虐待の疑惑問題を防止したり、あるいは適切に対応するために、危機管理活動を強化することが奨励されている』国際協議会のグループセッションにおいてもこの件が取り上げられました。これを受けて各地区で「緊急対策マニュアル」と「セクハラガイドライン」の作成が義務付けられ、野澤地区青少年交換委員長にお願いをしました。全国委員長会議で検討し12月には「虐待とセクハラガイドライン」がまとまる見通しです。このようなことはロータリアンの常識では考えられないことです。交換事業のイメージがダウンすることを恐れます。

しかし最悪の事態を勘案して受け入れ、派遣国双方が万一に備えてこのような防止策を協議し、取り決めておくことはむしろ今後の青少年交換事業に信頼性をもたらすことになるでしょう。またこの問題は単に青少年交換委員会の問題だけではなく新世代委員会全般にかかわる問題でもあります。ガイドラインが決まりましたら直ちにクラブ会長・幹事さん宛てにお送りする予定です。

ロータリアンは地域社会の指導者として青少年の模範でなければなりません。しかしまたロータリアン自身、少年の心を失ってはならないのです。

ポール・ハリスに『わがロータリーへの道』という晩年に書かれた著書があります。この自叙伝は主としてロータリーの故郷、ウォーリングフォードにおける少年時代の思い出が生き生きと綴られています。序文は次のように書かれています。「私の70余年の人生で大切なものが2つあります。1つは古里ニューイングランドの谷間、もう1つはロータリー運動です。私がロータリーに身をささげるようになった源を探っていくと、谷あいの故郷、村人の人情や宗教や政治に関するおおらかな心にまで遡ることが出来ます」。そして彼の幼少時代を過ごしたバーモントの小さな村の自然、山や河や池、ピューリタンの末裔である祖父母との慎ましやかな暮らし振りを懐かしく書き連ねております。その彼がシカゴの町で弁護士を開業しました。「弁護士の看板を出すことはやさしいが、まさか完全に無視されるとは思いませんでした。もちろんお客はぜんぜん来ませんでした。石の上にも3年、どうにか仕事は軌道に乗りました。私には大切なものが1つ欠けていました。友達でした。シカゴの町には溢れるほどの人がいる。しかし自分には1人の友もいない。非常に淋しい、恐ろしいほどの孤独感に襲われました」。シカゴは人の心の砂漠でした。そこで同じ孤独感に悩まされている3人の仲間と作ったのがロータリークラブでした。ロータリーの原点はここにあります。「ロータリーが会員を導いていく方法の一つは彼らの気持ちの中に少年時代の心を残すことです。善良な人の心の中には、少年時代のことが焼きついていま

す。少年時代には、人生を見る目は素晴らしいもので、清らかな眼で偏見は無く、寛容で熱意と友情に溢れています。少年の心を失ったといわれることは悲しいことです。少年時代の心を失わなければ、老化現象は起きません。ロータリーは少年時代の心を忘れずに発展向上を目指す団体です」。

しかし年齢とともにそういった少年の心が失せていくことは悲しいけれども事実です。今ロータリーの文献、資料の中には奉仕という文字はいたるところにありますが、フェローシップ（親睦）は見当たらなくなりました。しかしロータリーの発生時にあったものは温かい仲間意識でした。決して奉仕の理想ではありませんでした。ロータリークラブが奉仕団体だというのは1911年頃から意識されたことです。現在のロータリーはボランティア団体として組織の管理・運営が主体で少年の心などと言う言葉自体失われてしまいました。『ロータリアンは青少年の模範』でなければなりません。同時に純粋でみずみずしかった我が少年時代の心を老いさせてはなりません。その意味で『青少年はロータリアンの鏡』であります。悩める青少年に暖かい手を差し伸べる、その手を差し伸べることにより救われるのはむしろロータリアンのほうなのです。

私はかねてよりロータリーの古里をたずねてみたいと思っておりました。1996年、ポール・ハリス没後50周年の記念追悼集会が、シカゴのマウントホープ墓地で開かれました。そこへの出席を機会にロータリーの故郷、ニューイングランド・バーモント州・ウォーリングフォードを訪ねることが出来ました。

創始者が幼少時代を過ごしたニューイングランドの谷間には、当時の由緒ある建造物や、村の人々の人情がそのまま残されていました。ポールがはじめてA.B.Cを習った「赤い小さな小学校」、初めて泳ぎを覚えたフォックス池、父と一緒に鱒釣りにいったチャイルド川、毎週日曜日に礼拝に連れて行かれたコングリゲーション教会などポールの子供のときのままタイムスリップしたように村のたたずまいは変わっていません。「赤い小さな小学校」はすでにポール・ハリス記念財団によって維持され今はウォーリングフォードロータリークラブの例会場となっています。昔、国際協議会がニューヨーク州のレークプラシッドで開かれていたとき、研修に参加する世界中のガバナーエレクト達が往路、復路の際この村を表敬訪問しました。村人は彼らを温かくもてなし、彼らはロータリーの古里の人情を肌で体験しました。しかしただ一つ彼らが見ることが出来なかった場所があります。

それは赤い小学校の隣に1853年に建てられた祖父母の家でした。この家こそがポールが3歳のときから大学に入学するまで過ごした、彼の人格形成上かけがえの無い神聖な記念すべき家でした。風格のある家でポールの自伝には「我が家は大邸宅ではありませんが、それでも14部屋もあり…」と紹介されています。現在の住人が訪問者を嫌うという噂があり、今まで、ロータリアンも外観を見るだけで中を見た人はありませんでした。たまたま祖父母の家の真向かいにある宿のマダムの口利きで祖父の家に現在住まいしているご夫婦が家の中を案内してくれるという予期せぬ申し出がありました。その家のご主人マーカスさんは個人資産の鑑定人で家の中には時計、銀器など骨董品が溢れていました。そこで見ず知らずのものがなぜ招待されたのか謎が解けました。昼間宿で旅装を解いたとき話し好きのマダムと古いマイセンの話などしたので骨董好きの日本人と思われたらしく、そこで骨董鑑定人のマーカスさんに紹介してくれました。

ポールが「懐かしい家の面影は終生消えることはありません」と述懐した静かに年を重ねた旧家‥‥ポールの寝室、食堂などを案内されました。時を超えて、今にも少年ポールが隣の部屋から元気に走り出てくるような気がしました。家の壁紙は何度か張り替えられたでしょう。しかし昔からあるドアや窓はロータリーの創始者の少年時代を優しく見守ってきたことでしょう。ロータリーの歴史的な遺産を快

く見せてくれたマーカス夫妻に心よりお礼を申し上げます。

因みに近年ガバナーエレクトの国際協議会はロータリーの古里から遠く離れた西海岸に移りました。そのためポールが少年時代を過ごしたウォーリングフォードの村を訪れるロータリアンが少なくなったことは残念です。

最後になりましたが、会長・幹事さんのご健康を祈念いたします。

今こそ職業奉仕を！

はや夏も過ぎ爽やかな仲秋の候となりました。会長・幹事の皆さんにはお変わりありませんか。いつも地区の運営にご協力をいただきありがとうございます。私も73クラブのうち約３分の２の公式訪問を無事に終えることが出来ました。温かい心のこもった歓迎を賜り、おおぜいの方々と奉仕の機会として知り合いを深めることが出来、ロータリーの功徳を身にしみて感謝しております。

さて10月は職業奉仕月間であります。わたしは今年の地区重点方針の一つに職業奉仕の再構築をお願いしました。そこでロータリーの職業奉仕と云う概念はどのようにして生まれたのか、その背景を振り返って見ましょう。

日本のロータリーの始祖は、米山梅吉氏であります。三男の桂三さんが慶応大学の教授になり、「父米山梅吉を語る」という手記の中でロータリー運動について次のように語っています。『ロータリー運動とは、社会・経済史的に見ると、資本主義の発達という歴史的必然と、資本主義の欠陥を救おうとする人物の出現という歴史的偶然との交錯したところに生まれた運動である』

1880年頃から、20世紀初頭にかけてアメリカにおける資本主義は、独占体制の段階に入りました。そうなると資本主義の欠陥がいたるところに姿を現しました。そのような時代にあっては、健全な中産階級の中から社会改良思想が生まれてくるのは、けだし当然のことで、ポールハリスが、三人の友人と語らって何か世の中のためになるような集まりを作ろうじゃないかと、ロータリークラブを作った1905年が、ちょうど初期資本主義が最盛期を迎えた年だったということが、私には大変に興味深いのです。なぜならロータリーは、誕生のその時から資本主義の欠陥を救う運命にあったのだなと私流に解釈をしています。

では19世紀の末葉から20世紀初頭にかけてアメリカのシカゴには、どのような欠陥があったのでしょうか。資本家が政治・経済の主導権を握り、私利私欲中心の拝金主義が横行し、貧富の差の拡大により、スラム街がいたるところに姿を現し、シカゴは伝染病や犯罪の温床となり商業倫理の欠如の上にいたずらな繁栄が築かれておりました。シカゴはまさに弱肉強食の街でした。

このようなときには、中産階級の中から様々な社会改良運動が起こりました。まずセッツルメント運動ですが、これはジャン・アダムスの始めたハルハウスが有名です。これはスラム街の中に拠点を移し、そこで貧民の厚生運動をするものです。他にはアル・カポネが暗躍していた当時の風潮を反映して女性キリスト教禁酒同盟や、反酒場連盟が結成されたり、貧民に無関心であった教会も社会福音運動を展開し始めました。また救世軍活動や、YMCA、YWCAその他多くの慈善団体が現れました。

ロータリーはこのようなときに当たり、病める都市シカゴを救うために、どのような処方箋を書いたのでしょうか。ロータリーは特定の事業を標榜する奉仕団体ではなく、奉仕を志す人の集まりです。20世紀初頭の混沌としたシカゴで、ロータリーが目指した社会改良の処方箋とは、社会の基である個人の心を教化することだったのです。ロータリーは、人間の徳性の向上が人類社会発展の基本であることを信じて疑わないのです。ロータリーは一業一会員制によって選ばれた地域社会の中で最も特性を重んじる職業人が、毎週一回の例会で親睦のうちに各自の識見の広さと判断力を強化して、それにより社会を改良しようというものです。ロータリーは、資本主義の病を治すのに個々の人の徳性を向上させることにより、根本的、本質的に病根を治療しようとするものなのです。

では1905年の草創期に当たって一握りのロータリアン達は具体的に一体何をしようとしたのでしょう

か。彼らもまた資本主義の中で生活をしなければならないのであるから、まずその激烈な商業上の生存競争に勝利者たる栄冠を得なければならなかったのです。そこでこれらの人々がロータリー運動に参加したのは、親睦の場であるクラブの例会に彼らの企業上の問題を持ち込み、衆知を集めてその改善策を練り、それによって劣悪な資本家との競争に打ち勝とうとしたのです。ただここで注目すべき点は、彼らはその競争の手段としてあくまでも正直、勤勉を前提とし、友愛を根本として企業経営を行い、商業道徳をあげるということに専念しました。そしてその商業道徳の高揚による運動が、やがて自己の企業に利益をもたらし、資本主義の世界で勝利者となっていきました。つまりロータリー運動は、その根底において自己の発展を目的とする実践活動であることが明らかになるとともに、その実践活動の指導原理として、正直、勤勉、犠牲、献身、他人に対する思いやりといったような平凡な原則を心の中に常時温存しようとするものです。アメリカ人は出世物語が大好きです。それでロータリー運動は20世紀初頭の貧乏商人の出世物語とも言われました。ここでその具体的な例を一つ挙げてみましょう。

1930年、フーバー大統領のときアメリカ経済界は大恐慌に見舞われ、その影響は世界中に及びました。資本主義の過剰生産がもとで、銀行のとりつけ騒ぎが起こり、倒産、破産は数知れず、人々は職を失い家を失いました。しかしそのような大恐慌の中にあっても、ごく少数の人たちは何とか倒産を免れ、仕事を続けておりました。それらの人々はみな胸に見慣れない歯車のバッジを付けていました。彼らに何故この栄枯盛衰常なきとき、安定した企業を続けてこられたのかと聞くと、自分たちはロータリアンであり、ロータリーの教えを守って商売をしている。その教えとは「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」、「超我の奉仕」というモットーであり、他人に対する思いやりの心ですと答えました。そのときのロータリアンが偉かったのは、不況の最中自分の企業を守ったばかりか、不況で倒れた同業者の救済に乗り出したのです。そればかりか32代大統領ルーズベルトのニューディール政策にも企業倫理基準高揚のため献身的に参加しました。そしてこのときからロータリーの職業奉仕は、不況に強い哲学だと評判になり、ロータリーへの入会者は引きも切らない有様でした。職業奉仕の哲学は資本主義社会の中で、ロータリアンにも非ロータリアンにも、共にベネフィットを与える普遍の真理となったのです。

それから75年後の今、バブル崩壊後の日本は大不況にあえいでいます。情報革命を経て地球経済は一つになり産業構造は大きく変わり、資本主義は資本の論理により巨大化しました。もはや当の主体である人間の意志を離れ市場経済、多国籍企業という暴れ馬が怒涛のように世界を瞬時に駆け巡っています。いくら投機的な商業活動を罪悪視しても国際規模に巻き込まれてしまった我々はどのように行動することが合理的であり倫理的・良心的なのでしょうか。我々は新たな職業奉仕の基準をつくらねばならないのでしょうか。もはやロータリーの職業奉仕は色褪せてしまったのでしょうか。いや、ロータリーの職業奉仕の理念は資本主義社会が続く限り普遍の真理です。職業倫理と資本主義は車の両輪です。資本の論理だけの社会には人は住めません。

混沌とした今の時代に舵を取らねばならぬ企業経営者は孤独な決断を強いられます。正しい方向に進路をとり、足並みそろえてことに当たらなければ船は難破しかねません。トップの決断は会社の命運を担います。**企業経営者の拠り所は職業奉仕に徹する事、つまり【顧客の信頼を貫き通すこと】そして【超我の奉仕】というロータリーテーマの実践にあります。**大切な顧客の信頼を裏切れば手痛いダメージを受け企業の存亡は危うくなります。

“ロータリー新世紀”を迎えロータリーがかつての栄光を取り戻し、生き延びるためには、今こそ自己の企業と地域社会に大きく貢献できるロータリーの職業奉仕を再構築する事が急務です。

「寄付と喜捨」

会長・幹事の皆さん、いかがお過ごしですか。毎日、公式訪問に明け暮れておりますが、元気に過ごしておりますのでご休心ください。この月信がお手元に届くころは地区大会も73クラブの公式訪問も終えていることでしょう。

さて11月は財団月間であります。奉仕には額に汗する奉仕と、お金を出さなければ出来ない奉仕があります。ロータリー財団や米山奨学会がそれです。我々の捧げた一灯が人類平和のため、国際レベルの人道的、教育的プログラムを通じて、世界の隅々を照らす万灯の灯りとなることを祈ります。我々は単なるお付き合いの「寄付」ではなく善意の心を持って「喜捨」をしたいものです。しかし時々「財団」や「米山」に寄付を取られたという表現を耳にします。そこで「寄付」と「喜捨」について考えてみました。

アメリカでは「困窮者に対する寄付、慈善寄付」など日常の習慣として自然体で行っていますが、日本では寄付と聞くと、つい構えてしまいます。宗教観の違いでしょうか。

ロケット博士として有名な糸川英夫さんは、「日本の科学には神との緊張感が無い。なぜならニュートンの力学やアインシュタインの相対性理論を取り入れた時、背後にある神は置き去りにしてしまった。政治も経済も同じで、日本では失敗しても神への倫理的責任はあまり問われない」と云われました。ロータリーも同じです。ロータリーは本来中世キリスト教神学の復興運動でありますが、日本にやって来た時には背後にある神は置き去りにされました。ロータリーはピューリタンの戒律を一般生活の中で道徳として実践しようとする運動であります。特にアメリカは日常生活の中に神が遍在しています。ちなみにアメリカの全てのドル紙幣の裏には「In God We Trust（神に我々は信を置く）」というフレーズが印刷されています。社会の関係性が成立することを保証する主体が神であります。またアメリカ国歌、政治家のスピーチの中にも神に言及する表現が多くあります。

ロータリークラブの例会を教会の日曜ごとの礼拝になぞらえることは飛躍しすぎることかもしれません。しかしロータリーの哲学とその組織を考えると、両者が果たしている役割には、共通したものがまったく無いとは言い切れません。哲学と宗教は紙一重です。アメリカのロータリアンの中には日曜ごとの礼拝に欠かさず出ている人はたくさんいるでしょう。彼らは教会の他にロータリークラブの例会にも出ています。ところが幸か不幸か我々の多数はほとんど日常、宗教に関心を持っておりません。その結果、現代の社会は、「物と心」の乖離により嘆かわしい倒錯の世相になりました。戦後、連合国軍総司令部は教育基本法を作り、歴史や文化、伝統、宗教を否定し続けてきたのが原因です。特に宗教観の欠如により、自分の思想で自分を律することをやめた日本人は哲学を失い、ふわふわ波間を漂う根無し草となってしまいました。

ロータリーでは政治と宗教の話はしません。またポール・ハリスはことさらロータリーと宗教を切り離そうと気を使っておりますが、それは宗教戦争まで起こした一神教世界の歴史が念頭にあるからです。またロータリーを世界へ拡大するためにRIもキリスト教の匂いを消そうと努めました。我々東洋の多神教思想で育ったものからすれば、ロータリーも一種の宗教であっても構わないのです。儒教は厳密な意味で宗教といえないかもしれませんが、それでもやはり宗教的な何かを持っています。人間の倫理を構築する基本になるのは結局宗教でしかありません。ポール・ハリスは「ロータリーは宗教でもなければその代用物でもない。古くからある道徳観を」などといっていますが、ポールの道徳観の根底にあるも

のはやはりキリスト教ではありませんか。そう考えてくると我々職業人の信奉する宗教として、ロータリーの唱える「職業奉仕」の精神を挙げたいのです。

以前、仕事でオーストラリアに良く参りました。シドニー空港の２階フロアーにプラスチック製の募金箱があります。シドニーRCの名前が大きく書かれています。ロータリーのよしみでいつも帰国の際、余ったオーストラリアのコインや小額紙幣を入れていました。ある時一人の小柄な夫人がつかつかと募金箱に近寄って何がしかのお金を入れました。私は思わずその夫人にあなたはロータリアンですかと聞きました。いいえといって夫人は去って行きました。しばらくすると中年の男性が幾ばくかのお金を入れました。私はまた、あなたはロータリアンですかと聞きました。ノーという返事でした。時折通りがかりの人が浄財を入れていました。キリスト教の国では寄付とか慈善という行為は宗教的習慣として広く浸透しているのだなと感じました。町の交差点でも、足の不自由なお年寄りが渡ろうとすると何人かの人がバラバラと近寄り手を貸そうとします。神様は健常者の心を試すために障害者を作られた、だから健常者は障害者に進んで手を差し伸べる、それが神の御心に適うことなのです。

ロータリー財団への寄付も自分を中心にして人様に尽くすことが「良いこと=善」だと考えていると今ひとつ判りません。国際奉仕は相手の顔がまったく見えない。誰に奉仕しているのか知らずしてそもそも奉仕ということが成り立つのが不思議です。姿の見えない人に奉仕するとは一体どういうことでしょうか。言い換えれば私たちはまだ見たことも無い、話したことも無い、知らない誰かを、本気で愛することが出来るのか。奉仕という言葉がなじめません。もともと奉仕とは神に仕えるという意味です。日本では人が人に仕える時は奉仕とは言いません。「奉仕の理想」と云っても日本人にぴんときません。奉仕という言葉を日本人に判りやすい表現に置き換えると「ご恩返し」になるでしょう。「ご恩返し」は２通りあります。受けた恩を直接相手に返すギブアンドテイク型のものと眼に見えぬものへの恩返しがあります。もともと私たちの受けている恩というものが、必ずしも見える相手からの恩ばかりでなくむしろ見えない誰かから受ける恩のほうがずっと多いということに思いをいたすなら見えぬ人たちへ恩を返すのは当然であります。宗教的にいえば、私たちがここに生きていることだけで、宇宙からの無限の恩を受けているわけで、私たちの無数の先祖の血が今この命を支えて生かしてくれているわけです。私たちが見えぬかなたの人に向かって恩返しをするのは当然であります。

日本にも昔から仏教や儒教という東洋哲学の教えがあります。それらもロータリー財団への理解を深め、財団への「喜捨」をいっそう強固に裏打ちしてくれるでしょう。鎌倉時代の叡尊という律宗のお坊さんはらい（ハンセン）病の人たちを収容する建物を作ったり、貧窮者に手を差し伸べたり慈善事業を行いました。私は叡尊のものの考え方を聞いてびっくりしました。それはどういうことかと申しますと、らいを病んでいる人とか、あるいは飢えに苦しんでいる人とか、家の無い子供たちというのは、実は文殊菩薩がこの世に、仮に姿を現されたものである。生きとし生けるものをこの世に作り出し、生かしている造物主といってよろしいし、神様といってもよろしいし、仏様といってもよろしいが、そういう大きな存在が、そこに仮に姿を現したものである。そういう風に叡尊は解釈しましてらい病を患っている人に施しをするというのは、施しをするのではない。文殊菩薩に礼拝をし、供養するのであるとこういう風にとったのであります。我々もそのらい病患者も含め、一切を作っている大きな存在に対して、供養をし、礼拝するという気持ちでいささかなりとも自分に属している財物を捧げる。こういう風に考え

ますと、こんなことは政府のやることだなんて理屈を考えないで、恵まれない人たちに何かを恵んでやるというような、そういう捉え方ではなく、ごく素直に奉仕が出来るのではないかという風に自分を戒めることが出来たわけであります。

大いなるものに生かされていることを自覚し、自分に属するいささかの財物を「喜捨」することにより、執着心が取り除かれる、実は自分自身が救われるのです。普通は中々「財施」のチャンスは無いものです。ロータリー財団のおかげで「喜捨・財施」が出来るという風に考えてはいかがでしょうか。

「ロータリーの本（忘れ得ぬ一冊の書）」

地区大会を無事に終えることができました。ご参加いただいた全てのクラブおよび会員の皆様に心から感謝を申し上げます。

中島RI会長代理は、卓越したロータリー知識の持ち主で、また人間的にもスケールの大きい方でした。ロータリーは百年の歴史を終え「奉仕の新世紀」を迎えるにあたり、先人の心を訪ねその心をこれからのロータリーに活かすことが必要です。ロータリーの普遍の理念の大切さを改めてご指導頂きました。素晴らしい会長代理をお迎え出来たことは我々にとってこの上なく幸せなことでした。

また地区大会の目玉として新たに設けました「指導者育成セミナー」のプログラムは、片岡暎子氏、道下俊一PG、田中毅PGを交えて「財団フォーラム」、「新世紀シンポジウム」を開催いたしました。内容や成果につきましては、十分把握をしておりませんが、皆さんから示唆に富んだ内容であったとご好評をいただいております。天候にも恵まれ、ホストクラブの皆様の並々ならぬご努力のおかげで大過なく大会を終えることができました。ありがとうございました。

地区大会終了後の10月27日、私のホームクラブである札幌東ロータリークラブの公式訪問を終え、余すところ函館セントラルクラブのみとなりました。

思えば7月1日の小樽南RCさんを皮切りに、本当に大勢の方のお世話になりました。どのクラブの皆さんとも精一杯お話をさせていただきましたが、私の力不足で十分お役に立てなかったことをお詫び申し上げます。私が公式訪問で終始申し上げたかったことは、「ロータリーの目的は奉仕の心を育成すること」で、「奉仕はロータリーの目的ではなくロータリアンを訓練する手段である」ということでした。ここで自省の意味でもう少しロータリーの奉仕について振り返ってみたいと思います。

四国の今治RCに森光繁さんという会員がおられました。昭和26年に「ロータリーの本」というロータリーの綱領についての小冊子を刊行されました。私にロータリーとは何かを教えてくれた貴重な書です。昭和26年というと日本のロータリーが国際ロータリーに復帰したわずか2年後のことです。この本からいかに戦前のロータリアンの質が高かったか伺い知ることが出来ます。綱領は四項目からなっていますが、その中で特に綱領の第三奉仕部門、社会奉仕について、今まで全世界のロータリアンが誰もなしえなかった素晴らしい森氏の所説をご紹介します。

『綱領の第三に、「ロータリアン全てが、その個人生活、事業生活、および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」とありますが、奉仕の理想を千差万別な、日常生活に適用しようなどということは出来ることではない。なぜなら日常の千差万別な、そして何の脈絡も無く、相互に関連性無く発生する諸現象に奉仕の理想を適用しようと身構えることがそもそも無理なことである。それはあたかもザルで水を掬うようなものである。しかしザルを水の中に入れることはたやすく行うことが出来る。人間の心の世界は無限性を持っているから、これを「奉仕の海」に浸しておくと、心は「奉仕の海」に住んで常住坐臥、奉仕の世界から抜け出ることは出来ない。したがってその心を持って淡々たる行動を日常万般の生活の中で行えば、その行動はおのずから、奉仕の心の実践という形をとる』。

これが奉仕の心の適用に当たると説くのであります。もう少し徹底して云えば、一切の生活の中に「奉仕の理想」が適用されるというよりも、一切の生活が「奉仕の理想」の中に没入している姿が最も理想的であります。私はこの「奉仕の理想」を今年度のRIのテーマ「超我の奉仕」に置き換えていただきたいのです。

ステンハマーRI会長は、強調事項の一つに「超我の奉仕」をよく理解して実践してほしいといわれました。「超我の奉仕」を一片の知識（Knowledge）として理解するのなら中学生でも出来ます。よく理

解して実践するとはどういうことでしょうか。ステンハマー会長は単なる知識ではなく、智慧(Wisdom)にまで昇華させて欲しいと願っておられます。「超我の奉仕」を智慧にまで高めるとは、具体的にどうすればいいのでしょうか。

我々には本来の仕事があり、そのほかにロータリーがあるというのは間違っています。つまり我々の仕事や生活の一部分にロータリーがあるのではなく、我々の仕事や生活の基本が「超我の奉仕」の中に無ければなりません。日本のロータリーの始祖、米山梅吉氏の言葉を引用させていただきます。『自分の人生に於いて判断の背後にございますものはロータリーの理論でございます。その理論はどこから来たのかというとロータリーの例会出席を通じてでありまして、その意味でロータリーの例会は人生の道場といえます。私のことをロータリーの米山と呼んでいただいて結構です』。

森光繁氏のいわれた「奉仕の海」とは、米山さんにとっては、ロータリーの例会のことでした。

また私は、公式訪問の際困っている人の戸口にそっと物を置いてくるのは立派な奉仕の実践ですが、ロータリーでは困っている人の戸口へそっと物を置いてくることよりも、むしろ困っている人に物を届けるという心の境地のことを奉仕だといいました。「奉仕の心の育成」がロータリーの目的で「奉仕の実践」は奉仕の心を育成する手段です。

『奉仕の心の無いままに、ただ奉仕を形に現してロータリーを示そうとすればこれは奉仕ではなく寄付であり、慈善行為となってしまいます。奉仕をはじめから何か形で表そうとすることは悪く言えば安易を求めるものであって、決してロータリーの奉仕ではありません。見せたい奉仕、後に残したい奉仕、こんな衝動に駆られる気持ちも分からなくないが、何故奉仕を形にしたいために、どうしてあんなに苦労するのか。その苦労を例会を通じてロータリーの心を育成するための努力にしたらどうだろうか。奉仕がいかに華々しい形で示されてもロータリーの心のこもらぬものならば、その活動は奉仕ではない』これも森光繁氏の言葉です。

さて社会奉仕ですが、ライオンズクラブは例会のたびに寄付金を集めて団体で金銭奉仕をします。公園に時計搭を寄贈したり、町に救急車を寄付したりします。1917年メルビーン・ジョーンズによりテキサスのダラスで活動を開始し、今日のわが国の多くの地域社会において大変活発な運動を行っているライオンズクラブの奉仕に対し深い敬意を表しながら、一体ロータリーの社会奉仕は、ライオンズクラブのそれとどう違うのでしょうか。

まず云えることは、ロータリーの社会奉仕活動の資金はニコニコ箱が頼りで事業資金は持っていません。皆さんの払う年会費はクラブの運営費で、奉仕のお金は含んでいません。クラブの大小にもよりますが、大体一クラブあたり年間15万円から30万円くらいがニコニコ箱より割り当てられています。しかしロータリークラブは地域の中から選ばれた職業人の集まりです。その職業人たちが、年間15万円から30万円のお金を地域社会に還元したからといって、果たしてロータリーは奉仕クラブといえるのかという問題があります。実はこのお金は社会奉仕の事業費ではなくて、社会奉仕委員長さんが毎年、地域の中にどのような救済の手を待っているニーズがあるのかを調べる調査費であり、そしてそのニーズを会員に伝え、救済活動の働きかけをする「呼び水」なのです。

社会奉仕は、クラブ全体でも行いますが、大事なことは金銭による団体奉仕ではなくてロータリアン一人一人の個人奉仕なのです。綱領にあるとおり**「ロータリアン全てが、その個人生活、事業生活、および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」**なのです。

ロータリーの社会奉仕は“コミュニティーサービス”の訳語です。コミュニティーサービスを日本語

で社会奉仕と訳したものですから、おかしなことになってしまいました。社会奉仕というと、強い立場のものが弱い立場のものに対して何かを施す、恵んであげるというイメージがどうしても伴います。けれども、もともとのコミュニティーサービスは、「良き市民たれ」というのが本筋です。コミュニティーサービスを適当な日本語に訳せないかと考えたときに浮かんだのは、「親身になる」という言葉です。「親身になる」とは「相手の身になる」ことで「友情にあふれた関係」を作ることです。

「親身になる」ということが、自分の町内で発揮されれば、それがコミュニティーサービスです。お互いに友情あふれたコミュニティーを作ることが社会奉仕なのです。ロータリー運動の中核をなすものすなわち一番大事なものは、何であるかということを、仮に表現したならこのようにいえます。

自分の住んでいる町や市に対して、親身になれ、商売においても親身になれ、ということを高く掲げて、そのような人に育っていく事を手助けする。一人一人の努力も勿論大切ですけれども、一人より二人、二人より三人が、一緒に励ましあい教えあう中から、そういう「親身になることの喜びを味わえる」人々の和を広げていく事、これがロータリー運動の中核をなすものではなかろうかと思うのです。

また12月は家族月間です。一般的に家族というと両親、子供、孫といった身近な自分の家族を指します。けれども、ロータリーの云う「ロータリー家族」は、もっと範囲が広くクラブの会員はもちろん、元会員の配偶者、ローターアクターやインターアクター、青少年交換学生などロータリーと関わりのある全ての方々を含むようです。ロータリークラブは家族に似た個人関係を築く一方で、多様性を発揮します。「家族月間」とはロータリークラブが家族のように親しくなるには、更に何をしたらいいのかを考える「月間」にしてください。

最後になりましたが、会長幹事さんにはあわただしい師走を迎え何かとお忙しいことと存じます。向寒のみぎり、くれぐれもご健康にご留意の上良き新年をお迎えください。

ロータリーと否定の論理

新年明けましておめでとうございます。

会長幹事の皆さんには、お元気で新春を迎えられたこととお喜び申し上げます。松飾りもとれ、もうすでに新年の決意新たに活動を開始されていることでしょう。我々の年度もいよいよ下半期に入りました。人生にとっても組織にとっても大敵は「慣れる」と云うことです。「慣れ」から身を守る唯一の方法は、初心を忘れないことであります。どうか会長幹事さん、就任された際の謙虚で緊張したみずみずしい気持ちを忘れずに、当初の活動計画をチェックして、年度の仕上げにむけて一層の努力をお願いいたします。

ロータリーとは何かを考える上でもっとも大切なことは、ロータリーの精神とは何かということです。選ばれて初めて入会した人や、手続要覧に初めて出会ったロータリアンは、その難しい理屈に圧倒され、しばしば途方にくれるでしょう。このようなロータリーを管理する技術的仕組みは、もちろん重要ではありますが、第二義的なことに過ぎません。私たちはその組織規定に迷わされること無く、技術の背後にあるロータリーの精神を見抜かなければなりません。いくらロータリーの奉仕プロジェクトを学んでも、その精神がわからなければ、ロータリーがわかったとは到底いえないでしょう。ロータリーの精神とは、一言でいえば倫理であります。ロータリーは職業人の集まりです。それゆえロータリーとは何かという問いは、職業倫理とは何かという問いに置き換えられます。法学は正義を探求し、芸術は美を探究する、科学は真理を探究するという例に例えるなら、ロータリーとは職業倫理を探求するということになります。だからロータリーに入会したものは、倫理を求め、職業奉仕を実現する精神を身につけなければならないのです。この原点を忘れたものはロータリーについて語る資格はありません。

では職業奉仕を実現する精神はどこで身につけたらいいのでしょうか。それはロータリーの例会です。また奉仕の海を航海する者、何を一体目印にしたらいいのでしょうか。それはロータリーの開発した良質な理念なのです。理念にはロータリーの綱領、ロータリー標語、４つのテスト、ロータリー倫理訓などがあります。ロータリーのバイブルである決議23－34によると、これらの奉仕の理念を団体で学ぶこととあります。次いで各会員から自分の業界に無い知恵を学びます。つまりロータリーの例会は会員同士が切磋琢磨してロータリーの理念と異業種の知恵を学ぶ教育的な場なのです。

そのためにロータリーは比類なき、特別の制度を用意しています。ロータリーは無数の歯車から成り立っています。その中で特に重要な二枚の歯車があります。それが「職業分類制度」と「例会出席」です。ロータリーはこの二つを失うとロータリーという名前は残ってももはや異質の団体となります。「職業分類制度」の原則は一業一会員制です。職種が異なるとそこから発想する人生観がそれぞれ違います。自分の業界に無い異業種の智恵を毎回の「例会出席」を通じて学び自分を高めていく、これが奉仕の心の育成にあたります。職業が違うということは互いに『異質』であります。またロータリアンは企業の管理者としてレベルは同じです。レベルが同じだと仲良くなれます。レベルが同じということは互いに『等質』です。『異質』と『等質』が出会うと爆発的自己改善効果が起こります。ロータリーで漠然と切磋琢磨とか自己改善とか言いますが、これは『異質』と『等質』の出会いのことなのです。ロータリーは異業種の会員の知恵を例会の親睦を通して学ぶことなのです。

近年、悲しむべきことはロータリーを隆盛に導いたこの比類なき「職業分類制度の原則」と例会への「規則的出席」がないがしろにされ、換骨奪胎、ロータリーは人を作る運動から、人道的国際ボランティア団体に移行してしまったことです。しかし奉仕の新世紀を迎えてRIは職業奉仕の再構築を提唱し、

原点回帰の姿勢が見えたことは日本のロータリアンにとって朗報です。

ここでもう少し例会での『切磋琢磨』という表現を認識論的に分析してみましょう。ここに否定の論理の存在を見ることが出来ます。

ロータリーはその発展過程において〈他人の立場に立って〉という自己研鑽の原則を確立しました。しかし〈他人の立場に立って〉という原則は、日常の例会では他の会員に対する妥協的対応のみ見られて、相手の気持ちにひたすら迎合することと誤解されています。これでは『切磋琢磨』とはほど遠い次元です。

本来の〈相手の立場に立って〉ということは、例会場で自分の心の中にもう一人の自分をおいて、現在の自分を否定することです。もう一人の自分が他の会員の言動を見習って、自己否定（反省）することによってロータリアンの境地は進化します。

このことを明確に解明したのは、青森ロータリークラブの渡辺泰助氏でした。氏の会長時代の会報（1968年1月4日）の〈他人の立場に立って考える〉という小文を引用します。『奉仕第一、自己第二という標語があります。この言葉もよくロータリーを表していましょう。しかし私は〈他人の立場に立って考える〉ことが、ロータリアンの基本とされるとき、それに最も深い意味を感じます。〈他人の立場に立って考える〉ということは、人間の自覚という作用の構造を実に良くあらわしていると思うのです。考えるのはあくまで自分であって他人ではありません。ですから〈他人の立場に立って考える〉ということは、自分の中に、自分でないもうひとりの自分‥‥非我といっておきましょう‥‥を持ち、その立場で考えるということになりましょう。自分で自分の目を見ることは出来ません。いったん、鏡か何かに映して見なければならないでしょう。これと同じように、自分で自分を直接知ることは出来ません。非我の立場に立って自分を見て、初めて正しく自分を知りえます。つまり、いったん自分から離れることが必要です。自分についていてばかりいては駄目なのです。非我の立場というものは広いものです。自分を深いところから支えている立場です。

自分‥‥我は、空間的にも時間的にも限られたものです。これに対して非我は無限に連なるものです。ですから自分の中に非我を持ち、その立場に立つことによって、限られた身の我が、限られたものではなくなるのです。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれということでしょう。我だけで持ちこたえられる時間は知れたものです。我は非我によって歴史に耐えられるものなのです。〈他人の立場に立って考える〉という思想はロータリーに固有のものではありません。もっと普遍的なものです。非我の立場に立ちがたい、打算の世界にこれを適用しようとするところにロータリーの本領があると思うのです』

青森RCより40年前の会報を送ってもらいました。渡辺氏はロータリーの例会における否定の論理の存在を明快に解明されました。これは誰もが為しえなかったことで　私は氏をロータリーの恩人と呼んでおります。

このようにしてロータリー思想の根底には、個々のロータリアンの認識の世界において、奇しくも正反合、直感・反省・自覚という弁証法が作用していることを知ります。〈相手の立場にたって考える〉ということは、相手に迎合することではなくして、ロータリアンがその心の中に客観的自己を立てるに当たって、相手側の行動を媒体とすることを意味します。これがあればこそ個々のロータリアンがその境地の向上を果たすことが出来るとともに、例会出席およびロータリーの教育的機能の実態がわかるの

であります。否定の否定は「重要な発展法則」であります。

ロータリー運動の目的は個々の会員の自己研鑽です。職業人として更に自分を高めるために他の業界の知恵を例会で謙虚に学ぶのです。そのために漠然と例会に出席するのではなく、ロータリーの例会で自分を磨くのだという自己研鑽の目的意識を持って出席することが必要です。自己研鑽の目的意識を持つということは、〈他人の立場に立って考える〉ということなのです。

「ロータリーとは何か」、「ロータリアンとは何か」がいつも問われますが、これは簡単に答えられる問題ではありません。ロータリーは理解しやすいと同時に定義しがたいものです。ロータリーとは、対立する政治・哲学、宗教、信条の違い、文化的価値の違いが唱える「否定」を潔しとせず、これを超越することによって国際親善と理解を妨げてきた障壁の全てを乗り越えていく生きかたであります。ロータリーはこれらのイデオロギーや信条の違いに関する究極の問題に対して対決するのではなく、寛容の精神でこれらが持つ価値を止揚（他人の立場に立って考える＝否定の論理）して、人間性を高める生きかたです。

このような考え方から、ロータリーにあっては、例会における親睦活動のうちに各自の精神的境地が接触し、自己否定の論理を媒体として各自の精神的境地が高まり、支配ではなく寛容の精神によって社会集団活動が目的を達成するという理論構造を持っています。まして国際紛争を武力行使によって解決することを認めないのです。

『ロータリー理解推進月間』にあたり例会における自己研鑽・切磋琢磨の必要条件を少し掘り下げて考えてみました。

今（11月10日）、この原稿を書いている時テレビで鳥インフルエンザの対策がしきりに報道されています。どうか会長幹事の皆さんくれぐれも風邪にはお気をつけください。

[追悼記念週間]ロータリー揺籃の地ウォーリングフォード

会長・幹事さん、寒さ厳しき折からいかがお過ごしでしょうか。お元気のことと存じます。1月27日を含む1週間はポール・ハリスの追悼記念週間です。ロータリー新世紀を迎えた今、この運動の大河のような今日の姿を源泉にまでさかのぼり、ロータリーの始祖はどのような過程でこの運動のアイデアを得たのか探ってみることは、まことに意義深いことであります。創始者の追悼週間を迎えて始祖の遺徳をしのびながらその心を今に活かしたいからです。そこで「月信9月号」でも少し触れましたが、今回は10年前、ポール・ハリス没後50周年（1996年）を機に訪れたロータリーの古里（ウォーリングフォード）の様子を拙著『ポールP. ハリスの足跡を訪ねて』よりご紹介します。

【1947年1月27日、ポール・パーシー・ハリスは79年に亘る生涯をシカゴで閉じてから既に久しく、50年の歳月を数えるに至った。かねてより、ぜひこの目でロータリーが生まれたニューイングランドの谷間を見たいと念願していたが、ポール・ハリスの没後50周年を機会にウォーリングフォードを訪ねることにした。

ニューイングランドといえば、誰もがメイフラワー号やピューリタン、ハーバード大学やボストン交響楽団を思い浮かべる。ここはアメリカの歴史と文化を代表する地域である。ポール・ハリスは1868年ウィスコンシン州のラシーンで生まれたが、3歳の時に父が事業に失敗したので、ニューイングランドのバーモント州、ウォーリングフォードの祖父母の家に預けられた。ロータリー揺籃の地ウォーリングフォードには、ポールが愛した少年時代と変わらぬ四季折々の美しい自然と、祖父の「ハワード・ハリスの家」と彼が通った「赤い小さな学校」、コングリゲーショナル教会などがある。

ウォーリングフォードに行くにはいろいろな交通手段があるが、オルバニー（ニューヨークの州都）経由で行くことにする。ニューヨークのペンシルバニアステーションから、8時30分発のアムトラック（日本のJR）のモントリオール往きに乗りオルバニーまで行く。車窓の左手には対岸の緑が霞むほどのハドソン河が悠然と流れていて、ヨットハーバーが随所に見える。列車はひたすらハドソン河に沿って北上を続ける。2時間後にオルバニー着、あらかじめ予約しておいたレンタカーで、北ハイウェイ7号線から9号線を北上してウォーリングフォードを目指す。バーモントは仏語で緑の山という意味で、6月のグリーン山脈の新緑は殊の外美しい。楓、柏の中に白樺が点在して、所々にサイロが見え隠れするさまは、まるで北海道の緑豊かな富良野、十勝地方をドライブしているようである。ハイウェイの両側に時々骨董品の店（アンティークショップ）が現れては消える。週末にはニューヨーカー達が大勢このアンティーク街道を訪れる。ここはヤンキーの故郷なのである。

二本のグリーン山脈の間を走ること約2時間、行く手の右側にロータリーマークの立て看板が現れた。愈々ウォーリングフォードに来たのだと心躍る思いがする。楓の街路樹が並び、古いが手入れの行き届いた家が点々と散在している村のハイウェイを数百メートル行くと、教会通りの角にポールが少年時代、日曜日ごとに礼拝に通った白いペンキ塗のコングリゲーショナル教会が現れた。続いてノースメイン通り沿い右手に祖父のハワード・ハリスの家を見つける。そして道を挟んでその真向かいに、ウォーリングフォードでの今夜の宿、「ビクトリア・イン」の看板がある。ニューイングランドには、歴史的由緒のあるカントリーインが各村々にあり、それぞれ快適なサービスを提供している。「ビクトリア・イン」は1877年に建て替えられた3階建て木造で、フレンチスタイルの堂々とした邸宅をホテルとしたもので、それ以前はポールの自叙伝によると、祖父の友人ウェブスターの店と住まいで、祖父達80代の老人の唯一の社交の場となっていたところである。「イン」は若夫婦の経営で奥さんは日本人と韓国人の2世で、ご主人は、ドイツ系のスイス人でなかなか腕利きのコックである。悪戯盛りの男の子が2人いるが果たして彼らの血筋は何系に属するのであろうか、ともかくサービス精神に溢れたインターナショナルな明

るい家族である。ウォーリングフォードを訪ねられる方は、温かなもてなしと清潔で広々としたベッドと、ひなには希なおいしい食事のあるこの「イン」をお勧めしたい。ただし客室は、大小合わせて５部屋である。さて、インで小休止していると、ウォーリングフォードRCの元会長のディビット・バロー氏と次期女性会長のアン・ラチユーカさんが迎えに来てくれた。アン次期会長は、ご主人もウォーリングフォードRCの会員で、日本の向笠広次RI会長（1982－83）が、ウォーリングフォードを訪れた際のクラブ会長だったそうである。親子２代のガバナー、同じクラブで親子の会長の例はあるが、夫婦で同一クラブの会長を務めるというのは大変に珍しい。

まず、ポールが初めてABCを学んだポール・ハリス記念館（親愛の情を込めて、赤い小さな小学校と呼んでいる）を案内された。1928年創立のウォーリングフォードRCの現在の会員数は25人だが、赤煉瓦作りのこぢんまりとしたこの平屋建ての建物が、ウォーリングフォードRCの例会場である。もともとこの建物は、1818年にポールの曾祖父に当たるジェームス・ラステインが建てたものであるが、1928年、ウォーリングフォードRCが属する第787地区が地区内各クラブから募金して買収し、それを1948年にウォーリングフォードRCに寄贈したものである。玄関のドアを入ると小さなテーブルがありその上に25人の会員の胸章が並べられていて、右側には、来訪者を受け付けるテーブルがある。中は一間、６人掛けのがっしりとしたテーブルが左右に８台、これが教室であったとのこと実に質素な部屋、何の飾りもない。しかし、周囲の壁には世界各国から送られたバナーが所せましと架けられ、正面のガラスケースには、ポールの「わがロータリーへの道」の自筆の草稿や、海外旅行で贈られたゆかりの品の数々の記念品が並べられている。中央にはポールが1935年にマニラでの太平洋地域大会出席の途中、来日した際、米山梅吉から贈られた盛岡勇夫氏製作のポールの胸像が安置されている。　ポール・ハリス記念館の１軒おいて隣ノースメイン通りの1849番地に、1853年に建てられたポールの祖父ハワード・ハリスと祖母パメラが住んでいた家がある。この家こそが、ポールが３歳の時より大学に入学するまで過ごした、彼の人格形成の上でかけがえのない神聖な記念すべき家であった。ハイウェイを車で行くと、スレート葺きの屋根にハワード・ハリスの頭文字 "H.H" が、１世紀半の風雪に堪えてきた為に色は少し薄れてきたが、大きく描かれているのが読みとれる。白い２階建てのシンメトリカルな美しい、風格のある家で、ポールの自伝には「わが家は大邸宅ではありませんが、それでも14部屋もあり…」と紹介されている。家の周りは美しく刈り込まれた緑の芝生で、道路から玄関までの大理石の石畳の両側には、ピンクの芍薬が美しい。白い玄関のドアにも淡いピンクと白い花々で作られたリースがさりげなく飾られ、ここに住む人々の心の優しさが伺われる。このドアのあるポーチがポールの祖父のお気に入りの場所で、晩年、夏の午前中祖父は決まって此処でぼんやり時を過ごしたそうである。家の右奥に大きな白樺の大木がある。

ポールが小さかった頃は、この白樺も小さかったであろう。ハリス家の果樹園や、野菜畑はあの辺りだったのだろうか、またポールの寝室はこの窓の辺りであったのであろうか。いやが上にも想像は高まり、遥かなる遠い昔、ポールの少年時代のエピソードの数々が頭をよぎる。かつての祖父母のこの家には、ニューイングランドの古き良き時代の家庭を代表する素朴な美徳として大切な、犠牲心、献身、名誉、真実、誠実、愛情という、後にロータリーの原点となった他人を思いやる家風と躾があった。ポールが腕白時代を過ごした家の屋根の "H.H" の２文字を瞼にやきつけ、去りがたい気持ちを抑えロータリーの揺り籃、祖父母の家を後にした。

ポールの少年時代、手持ち無沙汰の子供たちに一番人気があったのは「デポ（Depot）と呼ばれた鉄道の駅であった。ポールは夜の10時になると祖父母の眠りにつくのを待ちかね、自分の部屋の窓からそ

っと抜け出し、機関手に気づかれないように機関車の最先端（エプロン）に座り込み、暗闇の中を近くのマンチェスター駅まで命がけの往復をした。その鉄道も廃線となって久しく、現在、消防署となっている旧ウォーリングフォード駅舎を訪ねる。「ずっと昔のある夏の夜、父、５歳の兄セシルと２歳年下の私の３人でアメリカ東部のバーモント州、ウォーリングフォードで汽車から降りました」と自叙伝『わがロータリーへの道』の第１章にあるとおりポールにとっては、わが懐かしき故郷の谷間に第一歩を記した記念すべき場所である。駅の側をロアリング川が流れている。橋を渡り林の中の道をフォックス池へと向かう。エルフィン湖とも呼ばれるこの池は、かつてポールの叔父ジョージ・フォックスが所有していたことがあった。森に囲まれた美しい池は、ウォーリングフォードの子供たちの格好のリクリエーションの場でもあるし、放牧された牛たちの水飲み場でもある。長さは南北に１マイル、対岸まで半マイル、ポールが初めて泳ぎを覚えたところである。そして秋になり周囲の木々が色づく頃、茸がたくさん採れるそうである。向笠広次RI会長がここを訪れたとき、子供たちがこの森で茸を狩りバーベキューをしてもてなしたそうである。

次に村のはずれのウォーリングフォードの「グリーンヒル墓地」を訪ねる。なだらかな芝生が丘の上まで広がり、近隣の山から切り出された大理石の大小の墓標が初夏の日ざしを受けて点々と羊の群のようである。ハリス家のゆかりの人々の墓は、墓地のゲートをくぐり約50メートルほど真っ直ぐに進み、そして右へ30メートルほど行ったところにある。その中でも高さ２メートルほどの、一際立派な尖塔が目につく。それがハリス家の墓で、下の台座には、ハワード・ハリスとパメラ・ハリスの祖父母の名前が記されている。両親と縁の薄かったポールは、祖父母をまたとなく慕っていた。後に彼は人々に対する奉仕の新時代を開いたが彼の人格を形成し、そうした資質をポールに植えつけたのは祖父母であった。その意味からも祖父ハワード・ハリスと祖母パメラ・ハリスの名は決して忘れてはならない。この二人こそロータリーの基礎を築いた功労者なのである。謹んで偉大な教育者の墓前に感謝の祈りを捧げる。

ニューイングランドの自慢は緑あふれたグリーン山脈と、四季折々に表情を変える湖沼の美しさであろう。この田舎の美しさや田園生活の魅力に取りつかれた、作家、芸術家にはあこがれの聖地であったこともうなずける。ニューイングランドは、まさにアメリカの歴史と文化を代表する地域なのである。ポール・ハリスは、自分の家系を辿るとピルグリムファザーズにまで遡るともらしたことがある。

1620年メイフラワー号で新大陸にやってきたピューリタンたちは「丘の上の町」としてみんなが仰ぎ見るような、教会を中心とした社会を作ろうとした。このイギリスからやって来た初期の移民は、宗教、言語、風習も等しく、厳しい自然の中でまとまりのある社会を形成した。そして他人を頼らず、勤勉と節約を旨とし発明好きで、進取的なヤンキー気質を持つ人間がここに生まれた。彼らは宗教や学問と共に、こうした生活態度をアメリカ各地に広めようと勤めた。その結果ニューイングランドは、「丘の上の灯台」として、文化的影響力を強め、もともと「ニューイングランド生まれの人々」を意味した「ヤンキー」はアメリカ人の代名詞となった。ロータリーはこのような歴史的背景の中、ニユーイングランドの谷間で産声をあげたのである。再び自叙伝より…「長い人生を振り返ってみると、あるときには重要だと思ったことが、年を経ると重要でなくなったり、また最初はたいしたことではないと思ったことが、後でこれはとても重要だと気がつくものがあります。犠牲、献身、名誉、真実、誠実、愛情はニューイングランドの古き良き時代の家庭を代表する素朴な美徳として大事なものです」…】

少し長くなりました。村の訪問記を書いたのは丁度10年前の６月のことでした。ウォーリングフォード村は村の地図を見ても130年前、ポールの幼少のころとあまり変わっておりません。200年前の教会や150年前の住宅・民家がそのまま現存して使われていました。美しい自然も、もてなし好きな村人の気

風もそのままでした。この村では古き良きアメリカにタイムスリップできます。ポールはシカゴの多忙な暮らしの中から、この村に帰省することを何より楽しみにしていました。ロータリー運動とは100年前の暗黒の街シカゴにおいて人々の心に潤いを与える、村の人たちのこまやかな人情、犠牲、献身、寛容など、ピューリタンの訓えの復興運動でした。追悼記念週間に当たりロータリーの古里に思いを馳せ、シカゴのマウントホープ墓地に眠る始祖のご冥福を皆さんとともにお祈りしましょう。

仮面（ペルソナ）を脱ぐ場所・ロータリーの例会

北国にも日一日と春の兆しが見えてきました。早いもので季節のうつろいと共に私も会長幹事さんの任期もまもなくローテーションします。あと３ヶ月、年度当初の活動計画をチェックしてください。そして次年度の会長幹事さんへの引継ぎ準備をお願いします。

３月13日を含む１週間は世界ローターアクト週間として、アクターと提唱クラブがともに共通の活動に参加するように求められています。

ロータリーはクラブという組織があってこそ、その目的が達成されます。同じようにローターアクトクラブ（インターアクトも同じ）は次代を担う青年男女がロータリークラブと同じくクラブ制度の長所を活かして自己研鑽のため、奉仕活動をする目的で生まれました。ローターアクトについては地区の担当委員長さんにお任せして、今月は「クラブ」について若干考察してみましょう。ではクラブ制度とはそもそもどのようなものでしょうか。人は一人では切磋琢磨できません。仏道を修行するにも叢林、僧林という言葉のとおりおおぜいの仲間が必要です。志を同じくする励まし合える同志が必要です。クラブ例会への出席は、これらのことをかなえてくれます。

クラブという団体は主にアングロサクソンの間で社交機関として発達しました。

古代ギリシャやローマ時代に類似の組織はありました。17世紀には、シェークスピアも会員であったブレッド・ストリート・クラブが生まれ流行のさきがけとなりました。歴史の無い国アメリカでは、クラブへの所属は、家柄や血筋に変わって身分の保証となりました。そのほかクラブは孤独を逃れ気の合った仲間と会いたいという集合欲をはじめとするさまざまの欲求（音楽、劇、スポーツ、コレクション、慈善など）を充足するだけでなく、家庭の代用ともなりました。クラブの要件の一つに会員のレベルの共通性が挙げられます。また本質的には親睦を目的とする活動でありわが国でも頼母子講、市町村の青年会も本質的にはクラブです。国際的な組織として、特にロータリーは会員同士の親睦の上に奉仕の理想を実践するクラブなのです。クラブにも統制力の強いもの、また比較的統制力のルーズなものがありますが、ロータリーは会員相互のアイデアの交換に重点を置くため出席に厳しく、統制力の強い組織です。ロータリーはクラブという制度を巧みに活用して世界170カ国に発展してきました。

先ほどクラブ制度の長所は志を同じくする仲間の切磋琢磨ということを申し上げましたが、もう一つ大事なことはクラブの会合で、本当の自分自身に帰ることです。

我々は普段「ペルソナ=仮面」をかぶって生活しています。ペルソナとはもともと演劇で役者がつける「仮面」を意味するラテン語で『人格・性格』を現す英語の「パーソナリティ」の語源です。人は「仮面」をつけることによって自分の素顔（内面）を人目にさらさず自我が守られます。社会の一員として生きていくため場面に応じて複数のペルソナを「役割」として使い分けます。人は「いくつもの取り外しの聞く顔」を持っています。社長としての顔、父親としての顔、夫としての顔など成長するに従い、人は社会の人々の期待する人物を演じるようになります。逆に言えば、社会生活を営むためには適切に自分を演じる必要があります。これらは全て自分の外側で演じられます。つまり自分の内面と外面の間に存在する仮面といえるでしょう。無論その仮面は社会生活を営む上で重要かつ必要なものであるからこそ身についたもので、今後も大切にしていかなければならないものが含まれています。ただしそのペルソナによって自分の本質が強く押さえ込まれている場合があることを知っておくことが必要です。

あなたのペルソナが強ければ強いほど、自分の本質を押さえ込み、仮の姿で現実を生きていることになるわけですから、あなたにとってそのペルソナが重要であればあるほどペルソナを外すことは難しく

なります。ペルソナはいうなれば身につけていれば生きやすくなるものです。しかしペルソナの持つ役割に支配されてしまえば本当の自分を見失ってしまいます。全ての人間は自分で自覚していない素晴らしい能力を持っています。日々の生活の中では、自分を見つめ、自分を知り、評価することは不可欠で、時には仮面を外して自分自身の真実の姿を鏡に映してみることも大切なことです。真実の自分を探すことで、自分を活かし、他者を活かす知恵を知り更に組織や社会で自分の果たすべき本当の役割について学ぶことが出来ます。

ロータリーの例会は仮面を脱ぐ場所なのです。例会場の入り口で、浮世で身につけたもの、すなわち企業の大小、社会的地位や、名誉、金銭の多寡などを脱ぎ捨てて例会に臨みます。ロータリアンは資本主義の厳しい競争社会の職場から例会に出席します。ロータリーの例会場は唯一競争の無い空間なのです。この平等で競争の無い空間に身を置きますとロータリアンの心はリフレッシュして少年の心に戻ります。ポール・ハリスは例会の一時間は子供に返り神様になる時間だといいました。社長業を長く続けると社長の顔しか出来ない人が出てきます。いわゆる社長病です。役割に応じて視点を変えることは必要です。

しかし子供の視線でしか見えないものもたくさんあります。ロータリーの例会は仮面を脱ぎ、純粋な少年時代の自分自身に戻り、見失った自分の内面と対話することなのです。

ポール・ハリスは自伝の中で「大都会シカゴの小さなグループに集まってきた会員には、ロータリーは丁度砂漠のオアシスのようでした。会員は会場の入り口で肩書きをはずし、皆もとの少年に戻るのです。私にとってはクラブの集会に出ることは、故郷の谷間に帰るのと同じことでした」と述懐しています。

人間の本質は洋の東西を越えて変わらぬもので、ポールの述懐と同じく、禅の訓えの中にもペルソナを脱ぎ本来の自分自身を取り戻す方法が伝えられています。中国の宋の時代、古来より伝わる公案を取り上げた無門関という一巻があります。その中で瑞巌老師の「主人公」という挿話があります。老師は毎日毎日、「おい、主人公よ」と自分自身に呼びかけて、「はい」「はっきり目覚めているかね」「はい、はっきりしています」と自問自答したといわれます。

自分自身が「主人公」なのは当たり前なのに、それをわざわざ主人公と呼びかけるのはユーモラスです。しかしよく考えてみると私たちはいつも日ごろ仮面をかぶっていて、いついかなるときでも本当の自分自身、「主人公」であると言えません。このように「主人公」とは、実は私たち一人ひとりの主体性、人間性のことです。その主体性が常にしっかりと確立し、人間性にはっきり目覚めていること、それが「主人公」であるということなのです。そう考えるとなかなか「主人公」であるということは容易なことではないとお分かりいただけると思います。私たちは、ややもすると、周囲に影響されて、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、ふらふら、うろうろしてしまいます。また、ともすれば自分の人間性を見失っているのが現状です。ですからまずこの「主人公」をはっきりとさせ、不動のものとしなければなりません。瑞巌老師のエピソードは確かにユーモラスですが、しかしひるがえって反省してみると、果たして今日どれほどの人が、自ら「主人公」と自信を持って問いかけ、「はい」と答えられるでしょうか。

人は時には仮面をはずして自分自身の真実の姿を鏡に映してみることも大切なことです。人間が成長する過程では、自分を見つめ、自分を知ることもまた不可欠なことで、真実を知ることは同時に自分のペルソナを知ることであります。その意味でロータリーの例会は人生の道場であり、ロータリアンが仮

面を脱ぐ場所です。もう数ヶ月すると私もガバナーの仮面をはずし、クラブの一会員として少年の心に戻りささやかながら奉仕の道を歩みたいと思います。

悟後の悟り・ロータリーは生涯学習の場

その人の人生においてロータリーと深く関わる人もいれば、ほどほどに付き合う人、ロータリーに席を置くだけの無関心の人もいるでしょう。人生とは何かという広く漠然とした問題に私は答えることは出来ません。しかし馬齢を重ねてきた自分の人生を省みて、なるほどこれが人生かとはっきり感ぜさせられるものがあります。それは私を一人の人間として育ててくれたもの、現に育ててくれつつあるものつまり出会いであります。私は自分一個の力で生きているわけではなく、自力で成長しているわけでもありません。さまざまの先人の残してくれた知恵、あるいは現在の先輩友人の導きによって人間となってきたわけで、特に私はロータリーで結ばれた友情に人生の人生たる証しを学ばせてもらっています。

ロータリーは単なる偶然の出会いや、好き嫌いでなく組織立てられた友情です。ロータリアンは自薦してなれるものではなく、他のロータリアンから推薦されてはじめて会員となれます。ただ推薦されずにロータリーの会員になった人がいます。ロータリーの始祖ポール・ハリスその人です。

では世界初のシカゴロータリークラブの第１回目の会合に出席したポール以下３人の会員はシカゴクラブのチャーターメンバーなのでしょうか。厳密に言えばチャーターメンバーとはRI加入前に選ばれた創立会員のことで、当時はまだRIもチャーター制度も無く、したがってチャーターメンバーとは言わず、４人には敬意を表して『パイオニア・ベテラン』と呼んでいます。

ではわれわれは何故ロータリーに選ばれたのでしょうか。いうまでも無くロータリーの目的を実現するためです。そしてロータリーの目的には、疑いもなく職業倫理の高揚という一つの哲学があります。つまり我々はロータリーの職業奉仕の哲学を遂行するためにロータリーの会員になりました。

ここに基本的な二つの問題があります。その一はロータリーにおける個人の問題であり、その二はロータリーにおける組織の問題です。第一に哲学をやるのですから、その基本的な主体は会員個人であります。またその活動は我々の日常生活から離れがたい、きわめて内面的なものになります。それは我々の考え方と行動の基本としての哲学であって、余暇に片手間にやればいいというものではありません。言い換えれば我々には本来の仕事があり、その外にロータリーがあると考えるのは間違っています。つまりわれわれの生活のある一部分にロータリーがあるのではなくて、我々の仕事や生活の基本がロータリー的でなければなりません。ロータリーの綱領の第三ははっきりそのことを示しています。

第二に我々の哲学は、孤立していないということです。ロータリーにおける主体は、会員個人でありますが、その主体は《知り合いを広めていく》というロータリーの基本的な行動の一つを通して、他の会員と係わり合い、他の会員を増やしていくことによって、共通の目的と精神に立つ組織を拡大し、同時にそのことによって我々の職業奉仕の哲学を普遍のものとします。みんなで力をあわせ、その理想を達成しようというのがロータリーという世界的な組織の存在する理由であることを考えれば、それは容易に理解できましょう。

職業奉仕の哲学の実践がロータリアンの務めと申しました。しかし、ロータリーの職業奉仕には他の奉仕部門（クラブ、社会、国際奉仕）と違い具体的な実践マニュアルがありません。ロータリーのマニュアル書である『手続要覧』の職業奉仕の欄を見ても《職業宣言》《四つのテスト》などについてわずか３ページ弱しか記載されておらず、全体の１％にしかすぎません。このことはRIが職業奉仕をないがしろにしているのではなく、ロータリアンは各人の業界から選ばれた人たちで、すでに入会前に職業奉仕の下地は常識として出来ている、だからロータリー入会後は例会で異業種の会員と切磋琢磨して更に

より良い職業人になることを期待されているのです。いまさら『手続要覧』で職業奉仕についてのべる必要はないのです。ロータリーの職業奉仕の実践は全てロータリアン個人の叡智に任されています。ロータリーのロータリーたる所以は生涯学習にあります。より良いロータリアンになるということは例会で自分の業界以外の会員と知り合い「己の限界を知り以って転機を生ぜしむる」ことが必要なのです。

今申し上げたように、ロータリアンは入会前に自分の業界の中で職業奉仕の大切さを悟ったおかげでロータリークラブの会員に推薦されました。そしてロータリー入会後、今度は異業種の会員と交わり更に悟りの道を歩むことになります。禅宗では悟りの後の悟りを「悟後の悟り」、または「聖胎長養」といっています。ロータリーは職業人の「悟後の悟り・聖胎長養」の場なのです。「聖胎長養」とは、修行者が重ねて修業に努め、仏の威儀を長く保つということです。「聖胎」とは、仏となるたねを宿した身体の意です。禅宗では厳しい修行に明け暮れ、師匠の印加を受けた後もまた更に俗世界で修行する義務が課せられます。一度悟った後更に人間社会のさまざまな苦楽を実際に経験してその後布教が許されるのです。ごく卑近な例に例えるのなら、「聖胎長養」とは医学生の「インターン」に当たります。卒業後更に実践経験を積むのです。ここでもう少し聖胎長養について申し上げるとそれは「面壁９年」の達磨大師から数え６代目の慧能は、十数年山中での聖胎長養を師から課せられたことがそもそも始まりです。また日本の大燈国師は師の大応より26歳で印加を受けましたが、京都の五条の橋の下の乞食や非人の群れの中で20年の聖胎長養の後布教をするようにと云われました。時の後醍醐天皇は当代第一の禅者は大燈をおいてないということを聞き、すぐ会いたいと云われます。それは無理でしょう。彼は五条橋下の乞食の中にいますから。帝は使者を使って探させます。使者は大燈が昔から好物だった「まくわ瓜」を持って河原に行き乞食の群れに向かって「脚無くして来るものにこれを与えよう」といいます。乞食たちは呆然とします。そこへぼろぼろの衣を着た乞食が来て「手無き手でそれを渡せ」といいます。この一言で大燈は見破られてしまいます。この禅問答から大燈は後醍醐天皇に付きまとわれて、とうとう帝の建立する大徳寺へ迎え入れられることになりました。この話は創作でしょうが私の好きな話です。

要するにロータリーは職業人の『悟後の悟り・聖胎長養』の場なのです。

ロータリー入会前に培ってきた自己の人生学の集大成の場なのです。そこに欠かせないのが異業種の会員同志の精神的親睦なのです。政治、宗教、職業観、人生観など各人の信条は異なります。その違いを認め合うことがポール・ハリスの『寛容論』なのです。互いの違いを認め合い、更に高い次元に切磋琢磨してスパイラルしていくために『寛容の心』は欠かせないのです。

さて４月は雑誌月間です。公式訪問先のいくつかのクラブでは雑誌委員の方が「ロータリーの友」を会員に配布する時、今月の見どころ、読みどころを丁寧に解説されていました。出来れば指導者のために年４回発行される「ロータリーワールド紙」やRIのウェブサイトの情報も積極的にPRしてください。クラブ活性化に情報は欠かせません。

久しぶりに石庭で有名な京都の龍安寺へ行って参りました。案内のリーフレットに次の言葉がありました。

《禅とは「自己」を拝む宗教です》

《禅とは「自己」の自覚を深く掘り下げる宗教です》

この禅という言葉をロータリーと置き換えてみたらどうでしょうか。

《ロータリーとは「自己」を拝む運動です》
《ロータリーとは「自己」の自覚を深く掘り下げる運動です》

ロータリーも禅と同じく究極的には「自己」の仏性を磨く運動です。これは生涯通じて課せられたわれわれの義務なのです。最後にもう一つ皆さんもご存知の易経の**《積善の家に余慶あり。積不善の家に余殃あり》**という言葉を申し上げます。北国もいよいよ春めいてまいりました。どうかロータリーの皆さん、温かい奉仕の心を育んでください。

めぐる歯車

長い冬を終えて、春を待ちわびていた花々が１度に開く北国の目くるめくような季節がやってまいりました。おかげさまで我々のロータリー年度もゴールまで後２ヶ月となりました。RI会長のステンハマーさんは、ロータリー史上最高の標語「超我の奉仕」というテーマを我々に示されました。「ロータリー奉仕の新世紀」という歴史に残る新たなスタートの年に、ガバナー補佐の皆さん、会長・幹事の皆さんと共にこのテーマに沿って奉仕の一歩を踏み出せたことを誇りに思います。公式訪問では、会長・幹事さんとひざを交えてお話し合が出来ました。ロータリーを取り巻く環境は厳しいものがあります。その中で、会長・幹事さんはクラブ運営に知恵を出し合いながら、奉仕の理想を推進されておられることを知り深く感動しました。

ロータリーの最大の特徴は毎年、役目がローテーションすることです。「職業分類制度」と「例会出席の義務」、そしてこの「交代制度」のおかげでロータリーは100年の歴史を重ねることが出来ました。国際ロータリー会長の任期も１年、地区ガバナーの任期も１年、クラブ会長さんの任期も１年です。ただ幹事さんだけは例外で何年続けて幹事の役職を勤められてもかまいません。アメリカのクラブでは幹事歴任50年というロータリアンが表彰されました。またロータリーのビルダーと言われたチェスレィ・ペリーはRIの事務総長（幹事）を32年間務めました。このような例外もありますが、原則としてRI会長もガバナーもクラブ会長・幹事さんも毎年新人です。毎年新たなRIのテーマのもと、みずみずしい初心を持って奉仕の道を歩んでもらいたいのです。ロータリーのような組織にとって一番の大敵は馴れるということです。マンネリはロータリーへの参加意欲を殺ぎます。営利を求める企業の場合なら馴れたベテランに何年でも同じポジションを務めてもらったほうが有利ですが、ロータリーのような非営利の団体は必ずしも奉仕プロジェクトの効率を追求しません。ロータリーは全会員がローテーションしてフレッシュな気持ちで四大奉仕部門はもちろん、クラブ、地区役員の任務を経験してほしいのです。全ての奉仕部門を経験して、奉仕の心を涵養してもらうのが狙いです。ロータリーは１年ごとにローテーションしますので、就任前の研修を入念に行います。クラブ運営について会長・幹事さんは次期の会長・幹事さんよりいろいろ相談を受けられていることと思いますが、どの家にも家風があるようにどのクラブにも歴史と伝統を踏まえた良き美徳があります。新しい酒は、新しい皮袋にと云いますが、その伝統の上に立って新しい活動を盛り込むようにアドバイスしてください。急な改革は革命と等しく情緒的結社であるクラブにはそぐいません。また大事なことは、ロータリーはその役職が終ると元の一会員に戻るのが原則です。たまに、役職が終っても次代へあれこれ口出しする人がいます。ロータリーでは院政を布くことはタブーです。私もガバナーを終えたら元のクラブの一会員になり、微力ながら奉仕のお手伝いをさせていただくつもりです。

ロータリーソング「奉仕の理想」の中に《めぐる歯車いや輝きて》とあるとおり、ロータリーの歯車は100年の間めぐり続けてきました。歯車は軸がぶれては機能しません。世の中の現象には「時代を超えて変わるもの」と、「時代を超えて変わらないもの」があります。歯車の軸とは、言い換えればロータリーの中核思想です。つまりロータリーの綱領のことであり、もっと具体的に云えば「職業奉仕」のことです。重要なことはひとりひとりのロータリアンがロータリーの「職業奉仕」を推進することです。ロータリーのプログラムが時代とともに如何に多岐に亘ろうとも、我々は所詮この出発点に戻らざるを得ません。我々は将来何が待ち受けているか知る由もありません。しかし我々はロータリーの「職業奉仕」を歯車の不動の軸として持つことにより、これからも確信を持って前進することが出来るというこ

とだけははっきりと知っています。

私は光栄にも新世紀（101年目）ロータリー幕開けの地区指導者に指名していただきました。幸いなことはロータリー100年の歴史を振り返り、総括することが出来ることです。およそ人類文化史上の諸制度は因縁あって栄え、そして因縁あって滅ぶという歴史上の真理に基づきます。ロータリーもその例外でなく、興隆期と衰退期がありました。過去をさかのぼり歴史の上から歯車の軌跡を追って見ましょう。

まず1930年から1945年にかけてロータリーはアメリカ社会から絶大な尊敬と信頼の目を持って迎えられました。何か確固とした実践の軌跡を残したに違いありません。アメリカは民間主導の福祉社会だから、労力と時間を割いてボランティア活動をするということはアメリカの国民にとって当然のことであり、別に尊敬と信頼の目を持って迎えられるということはありません。またロータリーが為すべきことでもなかったでしょう。ではいったい職業倫理の提唱団体として具体的に何をしたのでしょうか。ロータリーが出来た時アメリカの経済社会に、同業組合は１つもありませんでした。これをロータリーは作っていきました。公共に奉仕する現代の「ギルド」の復活です。このことは商工会議所を倫理を提唱する団体として蘇らせました。この２つはロータリーがアメリカ社会に残した最大の功績なのです。これこそがロータリーの「職業奉仕」の原点なのです。ではどうしてロータリーは同業組合を組織できたのでしょうか。我々は１業１会員制の原則に基づいて、同業者の中から選ばれてロータリーの会員になったと思っています。しかしロータリーはそのようには考えません。ロータリーの会員は同業者の中から選ばれたのではなく、各々の業界にロータリーが派遣した大使（使節）であると考えます。ロータリーの大使の役目とは、ロータリーの奉仕の理想をロータリアン以外の人にシェアーすることが目的です。したがってロータリアンは同業組合を組織して、ロータリー倫理訓（1915年）を基にした企業行動のあり方、職業倫理基準を提唱し広めていったのです。関東大震災の時に東京壊滅するという電文を見て直ちに、当時RIのなけなしの25,000ドルという大金を送ってくれたガイ・ガンディカーRI会長はレストラン経営に携わっていました。そこで全米レストラン協会を組織してその会長となり、道徳的なレストラン経営の倫理基準を作成しました（余談ですが、ケンタッキーフライドチキンの店頭に立っている白髪の等身大の人形、カーネルサンダースさんの胸にもロータリーの徽章があります）。このようにロータリアンの数だけ同業組合が組織され、商業道徳の高揚は著しいものがありました。この結果ロータリーに対するアメリカ社会の信用が高まり、ロータリーは爆発的に発展するようになりました。

このことは大変立派なことですが、そこでロータリーは１つの重要な過ちを犯すようになったのを知るのは残念です。ロータリー思想は世代の交代に失敗したということです。1947年ポール・ハリス没後、RIの職業奉仕委員会は廃止されました。ポールの死を悼んでPH・フェローができました。世界中のロータリアンから莫大なお金がロータリー財団に集まります。財団が事業を始めました。事業には莫大な資金が必要です。RIは人類の続く限り、ひとりでも施主の多からんことを望み、＄１でもお布施を増やし、限りなく永遠に金をつぎ込んでいかねばならぬ「火の車」からおりられなくなりました。職業奉仕はRIでは死語となりました。そもそもロータリークラブの会員を奉仕という点で訓練しようとする実験としてのみ考慮されていた対外的な奉仕活動がロータリーの拡大とともに、次第に会員個人から切り離され、奉仕活動それ自体の論理だけが推進力となって１人歩きを始めました。職業奉仕がないがしろにされ刹那的な人道的国際ボランティア活動が主流となりました。アメリカでは1950年、ヨーロッパでは

1960年、日本では1965年を超えると「実践」が「原理」から離れて独り歩きを始め、ロータリー運動はまさに虚飾性を強めるに至りました。ロータリーの組織もこのような制度疲労により会員減少が目立ってきました。職業奉仕の無いロータリーは魂の抜けた空洞です。

ガバナーとして公式訪問の際、ロータリーの真髄、職業奉仕の哲学を説かずにただ会員増強と財団寄付のお願いだけなら各クラブを個別訪問する意味がありません。職業奉仕を軽視してボランティア団体に重点をおくRIの方針に悩みました。しかしあきらめていたロータリーに起死回生の救世主が現れました。ビチャイ・ラタクルRI会長です。国際協議会で「ロータリーは何億人の弱者に救いの手を差し伸べてきた。これは偉大なことです。しかしそれはあくまで外面的なことです。奉仕の実践の源となる奉仕の心の涵養という内面的なこと、つまりロータリーの金看板である職業奉仕を我々は忘れてしまっていた。なんと恥ずかしいことか」。そして国際協議会で職業奉仕の再構築の重要性を熱くガバナーエレクトに話されました。職業奉仕という言葉は近年の歴代RI会長にとってはタブーでした。しかしラタクルさんのアドレスはロータリーの１番大切なものは職業奉仕の再構築にあるということを世界中のロータリアンに伝える勇気あるメッセージでした。1000人を超えるガバナーエレクトと配偶者は感動のあまり、熱烈なカーテンコールはやみませんでした。ラタクルさんのおかげで色あせたロータリーの歯車はまた輝きを取り戻しまわり始めました。

３月20日、そのラタクルさんが福岡西RCで講演をされるという知らせが、同期のガバナーからあり勇んで駆けつけました。講演終了後、数人のロータリアンとラタクルさんを囲んで夕食をともにしました。席上、ロータリーの現況と将来ビジョンを歯に衣きせぬ口調で明快に示されました。特にCLPについてはロータリーの綱領、すなわち四大奉仕が希薄になるので各クラブはCLPの採用をくれぐれも慎重に検討して欲しいと云われたことが深く印象に残りました。深い思索、全人格を傾倒してロータリーを語られるラタクルさん、最も敬愛するラタクルさんが遠い札幌から良く来てくれたと握手をして頂いたことは、私にとって生涯忘れられぬ思い出となるでしょう。2700地区の廣畑ガバナーありがとうございました。

会長・幹事さん、我々の年度はまもなく終りますが、ロータリーの歯車は回り続けます。どうか有終の美を飾って良き伝統を次年度に引き継いでください。

和魂洋才

昨年７月に会長幹事さんの皆さんと共にガバナーに就任して以来、早いもので一年の任期がもうすぐ終ろうとしています。おかげさまで無事に任期を終えることができそうです。まことにありがとうございました。いよいよ私の年度、最後のガバナーメッセージをお届けする時がまいりました。振り返ってみると私は月信でロータリープログラムや定款細則についてあまり触れませんでした。なぜなら地区にはそれぞれのプログラムのスペシャリストが地区委員長さんを務めておられます。したがって毎月の「強調月間」についてはそれぞれの委員長さんにお任せして、私はロータリー運動の本質について東洋哲学を背景にして「ロータリーとは何か」をお伝えしてきました。ロータリーはもともと20世紀初頭の資本主義の欠陥が溢れるシカゴを舞台とした中世キリスト教神学（ピューリタニズム）の復興運動でありました。ロータリーには脈々としてピューリタニズムの精神が流れています。それを私は東洋哲学の立場でロータリーの社会的意義を説いてきました。ピューリタニズムと東洋哲学では、奉仕観の根底に違いがあります。月信の最終号にあたりその違いについて考えてみました。

欧米では生活そのものがキリスト教の訓えの中にあります。食事の作法も東洋とは違います。以前、目にした『パンはちぎって食べる』という小文を紹介します。

「（ヨーロッパのあるレストランで）我々の反対側のテーブルに観光客風の日本人のカップルが座っていた。パンが来ると、男の方が丸かじりした。パンはちぎって食べよと日本でも言うけれども、小さなパンだと、つい、かぶりついてしまう人は今でも時折見かける。結局、マナーを暗記させるだけだからいざという時に駄目なのである。何故かという点を子供達に教えないのは大人の罪である。論理的に教えれば身につくのではないだろうか。何故ちぎるのか。これはキリスト教の《与える喜び》《分かち合う喜び》である。がぶりついてしまうと、もしここに突然、餓えて死にかかった可哀相な人が現れたら、口をつけていない方をあげることができない。だからパンは二つ割りもしくは、小さくちぎって食べなさいということになる。即ち、かぶりつくと「品の悪い人」「育ちの悪い人」どころではなく、もっと卑しいレベルの最低の人間と思われかねないのである。ここまで、説明すれば人目の気になる日本人ならばすぐにこのマナーはマスターするであろう」

この小文を読んで、キリスト教ではパンはイエスの身体であり、最後の晩餐の席上で12人の弟子たちにパンを取って賛美の祈りを捧げ、それを裂いてお渡しになったという歴史的背景があることを知ります。

しかし、これはキリスト教の歴史に裏打ちされたマナーです。東洋には無い一神教世界の文化です。東は東、西は西という言葉を実感します。

キリスト教の根底にあるのは「禁断の木の実」を食べたアダムとイブの原罪説です。ピューリタニズムでは堕落した人間はどんなに修養を重ねても許されません。彼らにとってこの世は涙の谷であり、やがて終るべき旅路に過ぎません。

しかも彼らは神の栄光を増すためにこの世を少しでも神の国に近づけようと努力するし、それが神に許される証となるのです。こうしてこの短い人生の旅路はやがて終るのだから我々は昼のうちに仕事をしておかねばならないという緊迫した気持ちを生みます。この世の楽しみを捨てて、全てを隣人愛の実践に捧げねばならないという巨大なエネルギーがほとばしり出ることになりました。そして経済活動を、神の栄光を讃え隣人愛を実践する手段と考えました。これが「ボケーショナルサービス」、職業奉仕の原点なのです。ロータリーの奉仕観にも、背景には「罪を詳らかにし、また許す神」との緊張感があり

ます。

一方日本の社会は東洋哲学（儒教・仏教・神道）が人々の生活を律してきました。
特に儒教ではこの世と人間との関係は徹底した楽観主義に立っています。つまり儒教の考え方によると、この世はさまざまな世界のあり方の中で最上のもの、そしてピューリタニズムとまったく逆に、人間の本性も善であり、修養すれば仏にもなれます。儒教の目指す人間の理想像は君子という表現で示されます。君子は徳が高いといわれていますが、それは道に従うことであり、この道とは一定の理法に従う世界秩序のことです。つまり人倫の道に従うことがこの世で目指す理想となります。儒教ではそうした外面的な作法、世間体を出来るだけ守り、そのために自分を抑制します。ロータリーの災害救援寄付も会長さんが1,000円出すなら皆も右へ習えで、皆1,000円を寄付します。もちろん各種の奉仕プログラムにも皆協力します。その意味において日本は世界第２のロータリー国であり、大きく国際ロータリーに貢献しています。しかし奉仕の動機に贖罪といった意識はありません。信ずる宗教の違いにより奉仕観に温度差があるのも事実でしょう。儒教での罪は秩序と調和を破ることであり、それは償いうる過ちであって、キリスト教の原罪といったものとはあまりにも遠くかけ隔っています。

このようにロータリーに対する接し方も、神の有無によりおのずと違いがあります。まず用語ですがロータリーで一番頻繁に出てくるものは「奉仕」という言葉でしょう。英語のサービスとは神に仕えることです。今申し上げたようにキリスト教の国では神に仕える奉仕という言葉に抵抗感がありません。なぜなら神が生活に密着しています。しかし日本では神社仏閣などでは清掃奉仕という言葉を使いますが、人との助け合いは奉仕とは云いません。日本語で奉仕と言うと、「値引き」「サービス品」といったイメージが先行して奉仕という言葉はどうしても馴染めません。神への贖罪という概念が無いからです。奉仕の実践そのものよりむしろ「天地の理法」を学び自己を練磨することがロータリーの目的と考えます。そもそも日本のロータリーは1920年、背後にあるピューリタニズムをそっくり抜いてアメリカから取り入れられました。しかしあらゆる文化的価値を追求する団体には背後に宗教・哲学といった純度の高いものの考え方が無ければ成り立ちません。日本ロータリーの黎明期、東京クラブのメンバーは米山さんを始めみな明治の士（さむらい）でした。みな東洋哲学は身に付けております。ロータリーを推進していく上で欠かせないものはそれぞれの国の宗教に裏打ちされた戒律、道徳、倫理観です。彼らはロータリー運動を推進するに当たり馴染みの薄いピューリタニズムに換えて東洋哲学を当ててロータリーを理解したのです。幸いロータリーの「隣人愛」はあらゆる国の宗教に内包された概念です。ただしキリスト教と仏教では根源的に「隣人への愛」はとらえ方が違います。キリスト教は根源的なものとして神を立て、神は愛を持って人間を作られたのだから、自分と同じく神の愛によって作られた隣人たちを愛して行かねばならないのです。
仏教はこれに対して根源に無我をおきます。我が無いということは自分と他人は２つでない、「自他不二」すなわち同じということです。自分も生きとし生けるもの一切の衆生も同じであるという認識から「一切の衆生を慈しめ」と慈悲の心を説きます。

明治維新政府は、近代国家を目指して西欧の科学の原理や文化、政治、経済の仕組みを積極的に取り入れました。それらは神との緊張関係の上に成り立っていましたが、ロータリーと同じように明治政府はそれらの背後にある宗教・哲学をすっかり抜いて導入しました。代わりにそれらの背後に東洋哲学を

置きました。そして西欧の文化を日本化して咀嚼することに成功しました。これを「和魂洋才」といいました。しかし第２次大戦後GHQにより日本の過去はすべて悪かったのだという空気が醸成されてしまいました。日本人は自分たちの過去、歴史にすっかり自信を失ってしまい、自分たちの文化、伝統、歴史を肯定的に捉えられない雰囲気が蔓延していったのです。日本人の心から東洋哲学が希薄となりました。哲学を失うと人は眼の無い魚のようになり自分がどこへ行くのかまったくわからなくなります。ただ現象を追って波間を漂うことになります。倫理、道徳、修身を忘れかつての「和魂洋才」が消えて、今は日本中「無魂洋才」の時代となりました。今、一番大切なことは単に生きることそのことではなくて、善く生きることです。善く生きるためには自分の成すべき事と為すべからざることを知らねばなりません。それを教えてくれるのが、宗教、哲学、道徳なのです。日本人の心の荒廃を憂います。

国際ロータリーもロータリーを興隆に導いてきた職業奉仕の哲学を捨てて、自ら人道的国際ボランティア団体、また世界最大のNPOであると宣言して久しくなりました。ロータリーの金看板である職業奉仕の無いロータリーは魅力を失い会員は減少しました。文化的価値を追求する団体は良質な哲学を失うと瓦解してしまいます。しかし幸いにも制度疲労を起こしていた国際ロータリーに偉大な救世主が現れました。タイ国のビチャイ・ラタクル元RI会長は「奉仕の新世紀」にあたり、国際ロータリーが久しく無視してきた「職業奉仕」の再構築を強く訴えられました。タイは敬虔な仏教国です。ロータリーを自己改善の精神運動ととらえる日本人にとって仏教徒ラタクルさんの勇気ある発言は永い間待ち望んでいたものでした。

日ごろご指導いただいている2500地区の道下PGの昨年の賀状に、「何とかロータリーの栄光をもう一度取り戻したいものですね」と書かれていました。私も同じ思いでした。しかしラタクルさんのおかげで再びロータリーは過去の栄光を取り戻すことが出来ました。ロータリーの栄光とはロータリアンがロータリアンであることに誇りを持つが故に、ロータリーの職業奉仕に心から心酔し、謙虚にロータリーを学び、ロータリーの綱領を日常生活で実践していた良き時代のことです。そのために今、我々に課せられた務めは、現代社会から失われつつある東洋哲学を家庭生活に、職場に、地域社会に再構築することにほかなりません。

最後になりましたが、会長幹事の皆さんが益々ご健康で、今後のクラブ発展のために更なるご活躍されることをご祈念申し上げペンをおきます。
お世話になりありがとうございました。

ロータリーこの麗しきもの

ガバナーとしての１年間を振り返りますと、そこにあるものは只々、皆さんが私に示してくださった友情に対する感謝の念のみです。ガバナー補佐の皆さん、会長幹事の皆さんお世話になりました。公式訪問でお伺いした73のクラブの会員の皆さんのお顔が走馬灯のように頭の中をよぎります。皆さんからそれぞれのクラブ運営について教えられました。その上、生涯忘れえぬ素晴らしい感動をたくさん頂きありがとうございました。おかげさまでなんとか過密な日程をクリアすることが出来ました。ガバナーになって本当によかったと今しみじみ「ガバナー冥利」を噛み締めています。最後に私を育んでくれたロータリーに感謝を込めて、いくつか思うところを書き連ねてしばしのお別れといたします。

《私の無知の眼を開いてくれたロータリー》

人生を人生として私たちに確認させるものは、一言で言うなら邂逅（出合い）であるといっていいでしょう。ロータリーの綱領の第一に「奉仕の機会として知り合いを深める」とあります。私はロータリーによって結ばれた友情に人生の人生たる証を見ようと思います。もしロータリーの会員に選ばれていなかったら、もしロータリーでめぐり合えた友人たちがいなければ私の人生はどうなっていたであろう、そこに生ずるのは身の引きしまるような感謝の念と歓喜であります。異業種の知恵に啓発され、自分の限界を知り無知の眼を開いてくれたロータリーに感謝します。

《地獄に落ちないで済みました》

職業は「隣人愛、自他不二」の実践のためにあります。しかし私は自分を取り巻く利害状況の中で「超我の奉仕」に徹した経営はまだ出来ません。利己と利他との調和に苦しんでいます。しかし何時かはロータリーの説く「超我の奉仕」に徹した経営を行いたい、今はロータリーの職業奉仕を全て実践できないが、常に理想と現実との距離を感じています。この距離感こそロータリアンをロータリーに向かはしめている根本でないでしょうか。同時に距離感を自覚していることによって、ロータリアンは無限に拝金主義の地獄に落ちないで済むのです。私は職業奉仕を学んだおかげで「企業経営」の本来の意味を知ることが出来、不況の中で何とか経営を続けてこられたことに感謝します。

《和して同ぜずとハリスの寛容論》

和するということは、個人的に見れば、自分と異なる行動や考え方に対しても仲むつまじく協調していくということです。我々は多くの場合表面は「同じて」いるように見えるけど「同じで和せず」であります。ロータリーは自由、独立心を持った人生観の違う人たちの集合体であります。この十人十色の自由人をまとめて行く一本の紐はフレンドシップでしかありません。ハリスは「共通の仕事に協力せよ。意見同じからざる問題はこれを避けて、あえて議論する無かれ。しからば我々は友愛を持って報いられるであろう」と云いました。もしこれが他者に対する「迎合」であるならばロータリーの例会出席には何の価値があろうか、しかしそのフレンドシップは「相手の立場に立って」「切磋琢磨」という精神世界として捉えなければなりません。この要素があるからロータリアン全体は「調和」と「寛容」の世界にすむことが出来ます。ハリスは「ナショナル・ロータリアン誌」第一号で、もし自分が神の思し召しによって高所に立ち、一堂に会するロータリアンを眼下に見下ろし、ロータリー思想の第一原理を説く機会に恵まれたら、私が云う言葉は一つ、それは「寛容」という言葉であると述べました。「寛容」を失うと「同ぜず和せず」となり混乱ばかりです。ロータリアンはイデオロギーその他信条に関する究極の問題に対して寛容でなければなりません。寛容の心はハリスの故郷、ウォーリングフォードの村人た

ちによって育まれました。

《どこで会っても100年の知己》

ロータリー草創期のアメリカの新聞「ヒューストンクロニクル」はハリスとロータリー運動を評して「彼が組織したのは奇妙な団体で、会員はその団体から何も得ないどころか、善を行うという特権のために会費を払うのである」と。これはロータリーの哲学を簡潔に表現しています。ただしロータリークラブ会員になった者は、ロータリーから得るものは皆無であるといわないでしょう。ロータリーで最も素晴らしいものを1つだけ挙げよと求められたら、たぶん一言、「友愛」と答えるでしょう。ロータリーは奉仕を志す善意あふれる究極の友が得られます。また世界中、どこのロータリークラブの例会に昼飯時に飛び込んでも、やぁ、よく来たといやな顔をせず歓迎してくれるのはロータリーだけです。日本はおろか世界中に友達が出来るロータリーは魔法の箱です。ロータリーは職業人と職業人との間に友愛の架け橋を架けました。魔法の箱を開くのはわれわれです。

《ロータリーのバッヂ》

ロータリーのバッヂはいいバッヂです。デザインがいい。やはりロータリーの伝統ある重みが、にじみ出ているからであります。そのせいか会員はいつでもどこでもこのバッヂを付けています。バッジの佩用率があれば、これはおそらく100%でしょう。これに比べて出席率の方はなかなかそうは行きません。このギャップはどうして出てくるのでしょうか。例会への出席は時間がかかるし、規則も面倒でなかなか簡単にはいかないが、バッヂをつけるにはそんな問題がありません。これは土台比較するほうが無理でしょう。しかしそれで片がつくことでしょうか。出席率のほうはしばらく棚に上げて、バッヂの佩用率が何故いいのかを考えて見ましょう。一口で云えば我々がロータリーに誇りを持ち、バッヂ佩用の効果を認めているからです。また我々が選ばれた人であるという意識を持っていることも作用しているでしょう。自らなろうとしてロータリアンたりえたものは一人も無く、ロータリアンとしての職業分類は、クラブによって業界の代表としての我々に「貸し与えられた」ものなのです。つまり我々は先輩が築いた信用をバッヂとして身につけているのです。ロータリーのバッヂはいいバッヂです。それは我々の資格を表すよりも、ロータリーに負うているものを深く自省する義務を示しているのです。

《多忙な人ほど例会を休まない》

ロータリーの会員は多忙な人ばかりであります。現代の特徴の一つは「忙しい」ことです。考えなければならないことは、この「忙しさ」をもたらしているものが、ハリスをして、ロータリーを作らしめたものであるということです。それは近代文明の生んだある一面であります。職業人同士の友情が無くなり、多くの貴重なものが「忙しさ」のために押し流されてしまいます。世の中が忙しくなればなるほど、ロータリーはそれに立ち向かっていかねばなりません。

そしてまた忙しさのために、我々はロータリアンとしての我々自身を押し流してしまわないようにしなければなりません。「ロータリーの例会は人生の道場である」日本のロータリーの始祖、米山さんの言葉を今一度噛みしめましょう。

《隠れキリシタン》

第2次大戦の前後、日本のロータリーは軍部の干渉により、昭和15年に国際ロータリーを余儀なく脱

会して、復帰したのは昭和25年のことでした。その間、ロータリーと名乗ることは許されません。その9年間多くのロータリークラブは名前を変えて毎週例会を開催していました。官憲の目を逃れ、空爆を避け、食糧事情も交通事情も劣悪の中、隠れキリシタンのように例会を重ねたのです。何が戦前のロータリアンをそこまで駆り立てたのでしょうか。彼らはぞっこんロータリーに惚れ込んでいたとしか云いようが無いのです。我々は、ロータリー運動は決してなくならないと多寡を括っています。あまりにも身近で日常の生活の一部になっています。しかしもし明日から、我々のロータリークラブが無くなったらどうしますか。心の中に空洞が出来ませんか。ロータリーで結ばれた友人と簡単に離別できますか。同じ奉仕の理想を持つ友を失いたくない、戦前のロータリアンを駆り立てたものは、友を求める心ではなかったでしょうか。そしてロータリーの職業奉仕の哲学に心から心酔しているからではないでしょうか。今の我々はロータリーに対して隠れキリシタンの情熱を持てるでしょうか。

《ロータリーの究極の目的》

ハリスは「ナショナル・ロータリアン誌」12月号で、『私たちの生きる道は何であろう。それは学ぶことです。何を学ぶために生きているのでしょうか。学ばなければならない唯一のことは、どうすれば自己に囚われないようになるかということです。遅かれ早かれ私たちは自己と決別せざるを得ません。最期の日を迎えるまで、自己に囚われているかもしれません。あるいは自然に、徐々に喜びを持って自分と決別できるかもしれません。人生の中で如何にエゴと決別するかを学ぶのです』と云われました。ロータリーは生涯学習の場です。人間は有限なるものです。死によって確実に限定されています。我々は平生健康な時は死を忘れていますが、死の方は一刻も我々を忘れてはいません。死の観念は我々の心を浄化してくれるでしょう。死を自分の前にはっきり据えた時、初めて自分のぎりぎりの生きる道が見えてきます。究極のところを般若心経の「色即是空」「空即是色」にたとえるのは飛躍しすぎでしょうか。我々は素粒子で出来ています。宇宙に繋がっている私です。生じたということも、無くなるということもない「空」なる知恵に目覚める人は、悟りの喜びを得て、エゴと決別できる人でしょう。

私はロータリーと邂逅できたおかげで人生について少し学ぶことが出来ました。もしロータリーと巡り会っていなければ私の人生はどうなっていたでしょうか。

最期に《ロータリーこの麗しきもの》に永久に栄光あれと願い、これからもロータリーが迷える職業人の師表となり守護神であることを祈ってお別れのメッセージとします。

メッセージを書くにあたり、参考・引用した文献

ポール・ハリス	“ロータリー理想と友愛”“My Road to Rotary”
〃	“ロータリーの創始者ポール・ハリス”（米山梅吉訳）
〃	“My Road to Rotary”
笹部　誠	“ロータリーあれこれ”
ガイ・ガンディカー	“ロータリー通解”
Oren Arnold	“The Golden Strand”
James Walsh	“The First Rotarian”
ハロルド・トーマス	“ロータリーモザイク”
小堀憲助	“ロータリークラブ”“ロータリー思想の理論構造”
〃	“ロータリークラブ”
〃	“ロータリー発生史”
佐藤千寿	“職業倫理”他多数
神守源一郎	“ロータリーで言う職業奉仕”
内田　稔	“無我の人　米山梅吉翁”
蒲原　権	“福島喜三次伝”
青森北東クラブ	“米山梅吉翁と青森県”
米山梅吉	“常識関門”
直木太一郎	“ロータリアン読本”
今田　恵	“人とロータリー思想”
ロータリー日本五十年史	
東京ロータリークラブ50年の歩み	
大阪ロータリークラブ五十年史	
森　光繁	“ロータリーの本”
森　三郎	“私のロータリー”
渡辺泰助	“青森ロータリークラブ週報より”
田中　毅	“翻訳文献・ロータリーの源流より多数”
井尻正二	“弁証法をどう学ぶか”
横山紘一	“十牛図・自己発見への旅”
大塚久雄	“社会科学の方法”
住谷一彦	“マックス・ヴェーバー”

塚原 房樹

（札幌東RC）

生年月日／昭和10年（1935）10月7日
自宅住所／〒064-0953　札幌市中央区宮の森3条13丁目5-23
職業分類／食肉加工
勤 務 先／㈱ホクビー　顧問
㈲青樹社　代表取締役

【学歴】

1956年3月　旭川東高校卒業
1959年3月　早稲田大学第一法学部卒業

【職歴】

1959年4月　㈲青樹社設立　専務取締役
1971年4月　㈱ホクビー設立　代表取締役社長
1995年5月　〃　代表取締役会長
2003年5月　〃　顧問
2003年6月　㈲青樹社　代表取締役

【ロータリー歴・クラブ】

1977年1月　札幌東ロータリークラブ入会
1983-84年　幹事
1997-98年　会長

【ロータリー歴・地区】主なもの

1988-89　地区幹事
1990-91　地区社会奉仕委員長
1992-93　地区幹事・地区リーダーシップ養成副議長
1996-97　地区情報委員長・地区史編纂委員長
1998-99　地区職業奉仕委員長
2000-01　地区文献資料室室長
2002-03　地区文献資料室室長・ロータリー100周年記念委員

マルチプル・ポール・ハリス・フェロー
ベネファクター　ポール・ハリス・ソサエティ
米山功労者

クラブ会長・幹事さんのために
《ロータリーこの麗しきもの》
2006年8月1日

著者：塚原　房樹（札幌東ロータリークラブ）
〒064-0953 札幌市中央区宮の森3条13丁目5-23　TEL（011）643-4133／FAX（011）642-7560
印刷：株式会社 須田製版　TEL（011）621-1000

SERVICE Above Self